

子育てを終えた夫婦2人の居場所

大規模訪問調査による住まい方の実態

調査報告書

旭化成ホームズ株式会社
ロングライフ住宅研究所

はじめに

当社では1998年にロングライフ住宅研究所を設立し、物理的な耐久性だけでなく、住み手が長期間満足して住み続けられる住宅を実現するために、居住者の意識や社会の変化を研究してきました。また同時に60年点検システムに代表されるサービス体制を構築し、居住者とのつながりを深めてまいりました。

長期間快適に住みつづけるための要件は様々なものがありますが、中でも家族がよい関係で暮らしつづけることは住生活の基本として重要な要素であるといえます。当社二世帯住宅研究所では長年にわたり、親世帯と子世帯が気がねなくひとつ屋根の下で暮らすことができる二世帯住宅を研究、提唱してまいりました。それは、日本における家族関係は親子関係が中心であり、欧米のように夫婦中心の家族関係とは異なることが背景にあります。

しかしながら、家族観の変化とともに子供と同居するのが大半であった従来の家族関係は大きく変わりつつあります。夫婦単独世帯が増加傾向にあり、夫婦だけで暮らすというライフスタイルが当たり前になろうとしています。特にこれから団塊の世代の子供が巣立ち、夫婦二人だけで暮らす世帯がますます増加していくことは明らかです。

ところが前述したように、日本では現代社会でも親子中心の家族関係で、「子はかすがい」などの格言、「単身赴任」という暮らし方、「亭主元気で留守がいい」などのコピーをみても、夫婦よりも親子関係重視という考え方が分かります。すぐには欧米のような夫婦中心の家族関係になるのは困難であると思われる。

つまり新婚時代は別にしても、夫婦だけの暮らしに慣れておらず、これから夫婦だけで家の中でどのような付き合い方をしていったらよいかについて、多かれ少なかれ不安を抱いている人も多いのではないかと(とりわけ妻側で)と思われる。

そこで、50代、60代で家を新築された方々が、実際どのような関係で暮らしているのかを、「夫婦二人の居場所」という視点で実態を調査したわけです。このような視点での実態調査は過去に例がなく、住宅メーカーならではの調査といえます。

2007年問題といわれる団塊世代の大量退職の始まりは、産業界だけの問題ではなく、家族問題、とりわけ夫婦問題の始まりでもあります。この調査がこれからの夫婦のよい関係をいかに築いていくかを考えていくための基礎データとして役立つことを願っている次第です。

最後に、調査にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

2006年12月 旭化成ホームズ株式会社
ロングライフ住宅研究所

目次

はじめに	2
調査結果の要約	5
第一章 調査の目的・方法・対象	10
調査目的 子育て後の夫婦2人で暮らす家造りの視点を探る	11
調査方法 ヘーベルハウス居住者への大規模訪問調査とアンケート調査を統合	13
調査住宅の概要 総面積は100～160㎡が全体の6割	15
家族構成 子育てを終え、夫婦2人となった、またはそれを意識している世代の夫婦	17
年齢構成と就業状況 夫は60代半ばに退職を迎え、在宅時間が長くなる	18
第二章 リビング・ダイニングでの夫婦の居場所と居方	20
居場所 個室があっても一緒にリビングダイニングに居る方が多い	21
リビングの居場所 自分専用の居場所で、それぞれ別のことをして満足	23
行為の分類 居場所での行為は、くつろぎ系とはたらし系に分けられる	25
別々のこと 夫婦はこんなふうに別々に過ごす	27
夫婦の居場所 夫はリビング 妻はダイニング	29
居場所の位置関係 居場所の位置関係は3パターン	30
居方 夫妻それぞれの居場所の関係を分析	31
コラム ふたりの距離の意味 1.5mと3mの輪	32
リビングで一緒に居る 内 内向きまたは平行で 距離は1.5m程度	33
ダイニングで一緒に居る 対面で距離は1.5m以内	35
リビングダイニングに離れる居方 外向き系が増え、3m以上離れる	37
コラム コレ・ソレ・アレという領域	39

第三章	リビング・ダイニングの居場所を決める要素	40
	居場所を決める要素 居場所を決める要素は 距離、動線、収納、窓	41
	距離 くつろぎ系とはたらか系の居場所は3m以上離せば両立	43
	動線 夫:妻の動線の外の落ち着ける場所 妻:キッチンに近く家事に便利な場所	45
	収納 居場所の近くに収納を	47
	窓 居場所から外が眺められる窓を	49
	居場所の4要素 いい居場所にするための要点	51
第四章	来客と外出・個室の役割	52
	来客 交流がしやすい家であってほしい	53
	個室の使い方 独立性が必要な行為がある	55
	寝室 夫のリタイアで夫婦別寝室傾向	57
	加齢配慮 介護を踏まえた将来の備えに関心が高い妻	58
	外出 夫婦ふたりでよく外出 妻はひとりでもよくお出かけ	59
	夫の家事 まだ夫の家事は少ないが、ちょっとずつキッチンに入る段階	61
本調査の意義	大阪大学工学研究科 地球総合工学専攻 助教授 鈴木 毅	62

調査結果 の 要約

リビングダイニングに 夫婦の居場所

1. リビングダイニングに居る時間が長い

夫の58%、妻の41%は個室を持っていましたが、個室を持っている場合でも夫の62%、妻の71%はリビングダイニング(以下LD)に居る時間の方が長く、LDの重要性が示されました。LDに自分専用の居場所がある率は夫妻共に6割を程度あり、「ないが欲しい」を加えると夫の75%、妻の80%がLDに居場所を持つようとしています。

2. リビングダイニングでは、思い思いに別々のことをしており、 リビングでは「くつろぎ系」、ダイニングでは「はたらき系」の行為

LDでしていることの1位は夫妻ともTV。新聞・雑誌と読書を加えたものが3位までを占めます。これは必ずしも同じ事をしている訳ではなく、夫婦別々のことをして過ごしている夫婦が8割以上を占めます。

LDでの行為は「くつろぎ系」と「はたらき系」に分けられます。

リビングではTV新聞読書の上位3つを中心として、横になったり、お茶をしたりというくつろぎ系の行為が中心です。ダイニングでも上位3つの行為は同様に多く見られますが、夫のパソコンや妻の書き物、アイロン、ミシンといった家事に関するもの等、はたらき系の行為が多く見られるようになります。

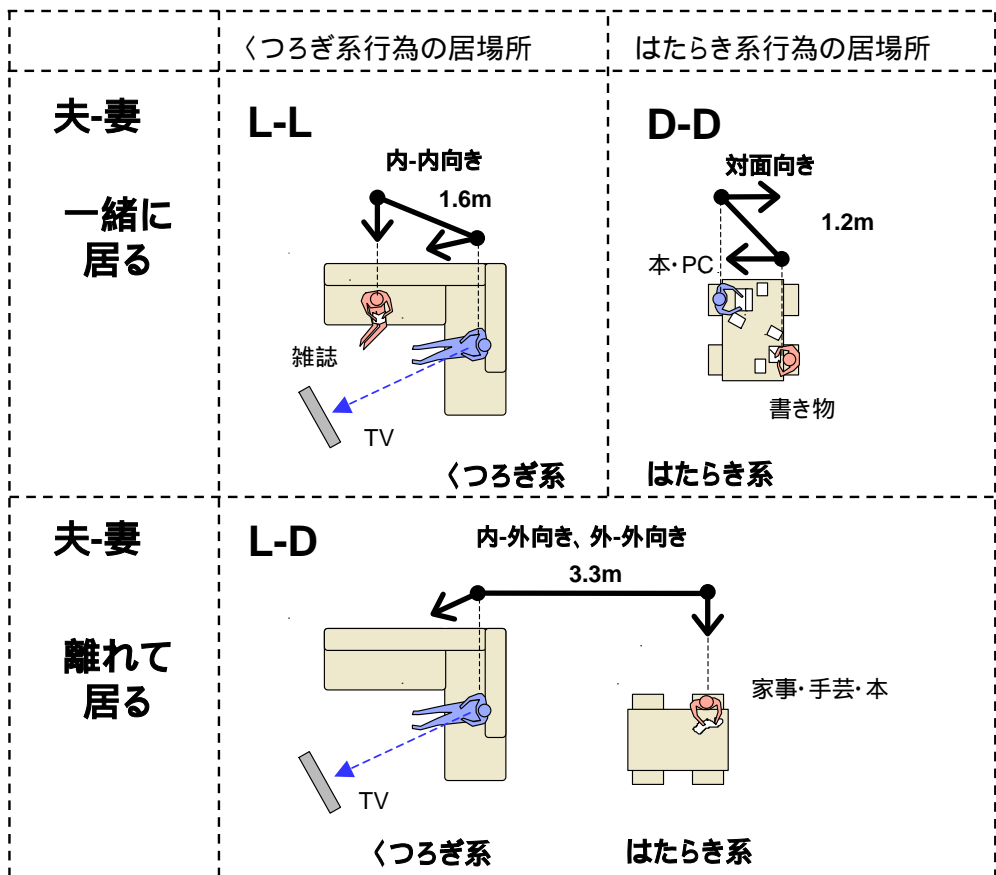
3. 夫婦の居方の組合せは主に3パタンに分けられ、 リビングとダイニングでは3m以上離れて外向きの居方に

LDでの一番多い居方はリビングに一緒に居るもの、ダイニングに一緒に居るもの、リビングに夫、ダイニングに妻と分かれて居るもの、の3種で全体の85%を占めています。

- 1)リビングに一緒に居る居方は、平均1.6m離れ、平行や内向きに座ることが多いようです。
- 2)ダイニングに一緒に居る居方は、平均距離は1.2mであり、対面して座ることが多くなります。上記2パタンの一緒に居る居方は、いつでも会話できる距離と向きになっています。

3)リビングに夫、ダイニングに妻と分かれて居る居方は、平均距離が3.3mと遠く、外向きが多くなります。これはリビングでくつろぎ系、ダイニングではたらき系のことが同時に行われる場合、気にならない程度の距離と向きを自然に選んでいるのではないかと考えられます。

夫と妻の居方・典型的パターン



距離は平均値、向き、行為は代表的なもの。

調査結果 の 要約

居場所が決まる要素は 距離、動線、収納、窓

4. リビングダイニングの居場所を決める要素は、 距離、動線、収納、窓の4つ

居場所を決める要素として、次のような傾向が見られました。

- 1) 距離: 「くつろぎ系」と「はたらき系」の居場所は3m以上離れ、外向き
- 2) 動線: 妻の居場所は家事動線が短くなるキッチンに近い位置が多く、
夫の居場所は妻の動線に邪魔をされない落ち着ける空間が多い
- 3) 収納: 居場所で用いられる多様な物品を近くに配置、収納する必要がある
- 4) 窓 : 居場所は外を眺められる場所であることが多い

5. 個室の独立性が、リビングの役割をサポート

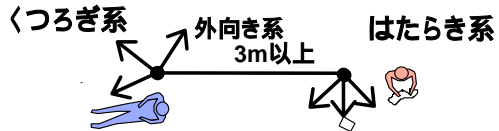
個室の使用頻度はリビングに長く居る夫婦が多いにもかかわらず高く、よく使う、という回答が、約7割ありました。個室は独立性が求められる場合に役立っており、長時間継続する仕事や趣味、音楽鑑賞、喫煙等の行為が個室を必要とする理由のようです。リビングダイニングと比較しての利点は配偶者に邪魔されず集中できること、食事などの際に中断しても片付ける必要がないことが考えられます。

友人の訪問頻度は60代リタイア層では夫妻ともに月1回以上が3割あり、頻繁に来客を迎えています。妻の友人が来客時の夫の居場所は6割が個室であり、個室があると妻の友人の来客を招きやすくなるのではないかと想像されます。

また、夫婦別寝のための個室や、親、または自分たちの介護を想定した場合の個室も考慮されることが多いようです。

距離

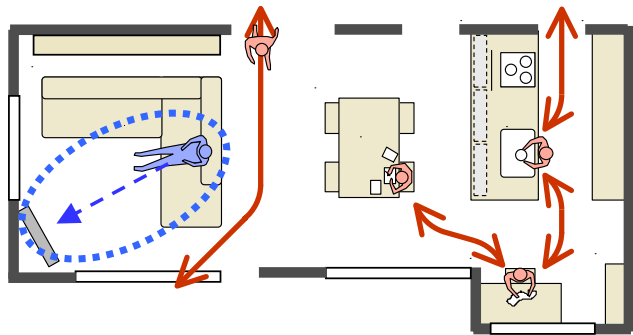
くつろぎ系とはたらき系の居場所の距離は3m以上離れて外向きである



動線

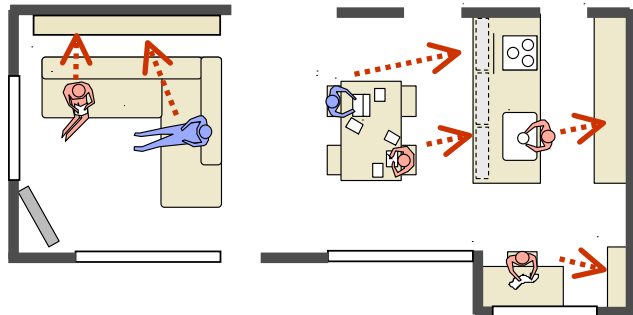
夫: 妻の動線に邪魔されない

妻: キッチンに近く家事がしやすい



収納

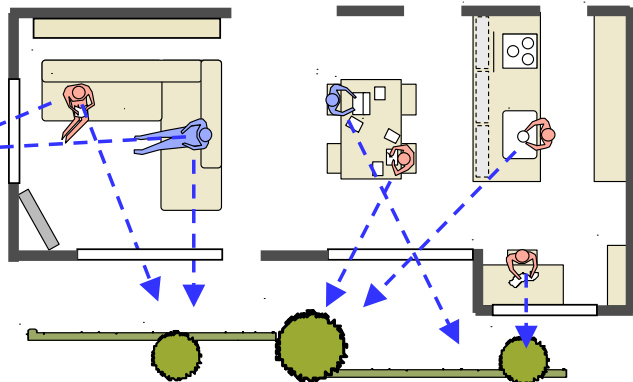
居場所の近くにモノの置場や収納がある



窓

居場所からの眺めや明るさがある

眺めがよい



夫と妻の居場所の傾向

第一章

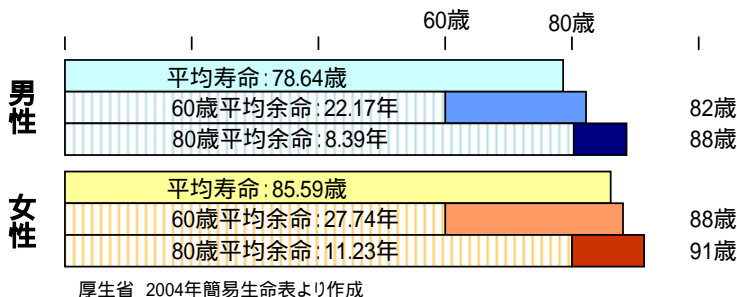
調査の目的・方法・対象

調査目的

子育て後の夫婦2人で暮らす 家造りの視点を探る

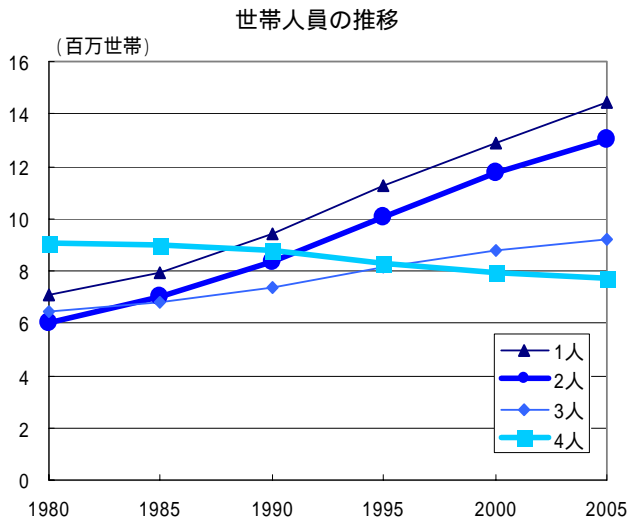
長寿化し、90歳は当たり前の時代に

60歳平均余命によれば男性は82歳、女性は88歳まで平均で生きると予測され、平均寿命を大きく上回ります。今後は90歳を超えて生きるための家が求められる時代になるでしょう。



標準であった4人家族は減り、単身、2人家族が増えている

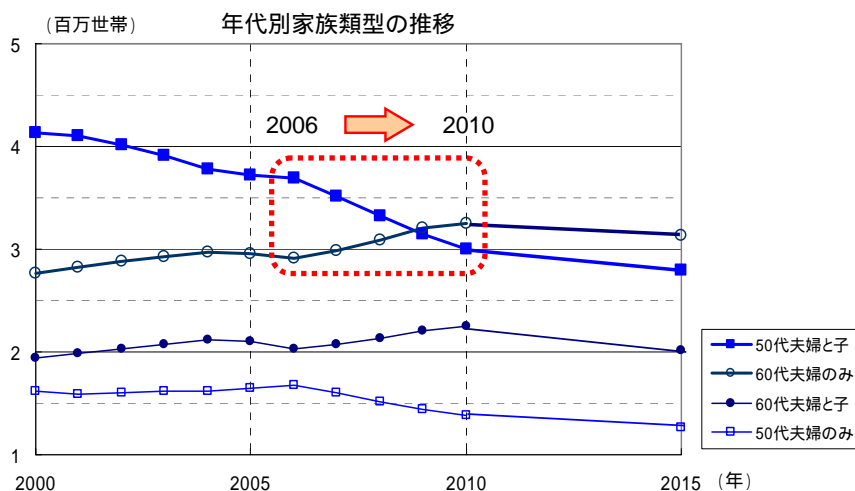
かつて家造りの標準想定は4人家族でしたが、2人家族世帯数は単身居住と共に4人家族を上回り、増加を続けています。



国勢調査 データより作成

「50代・夫婦と子」が減り、「60代・夫婦のみ」世帯が増加の予測

国立社会保障・人口問題研究所の予測によれば、「50代・夫婦と子」の家族は団塊の世代の60代への移行に伴い2006～2010年で約70万世帯減少しています。代わって増えるのは「60代・夫婦のみ」が35万世帯、「60代夫婦と子」が21万世帯であり、60代への移行に伴い子の独立も合せて進行していくと予想されています。



国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」2003.10推計 掲載データより作成

子育てを終えた夫婦2人の住まいにも注目すべき

このような状況から、今後は50-60代の今後子育てを終えていく世代の、夫婦2人での住まい方は重要な研究テーマになると思われます。これまでの家造りは4人家族、核家族の子育てを中心に行われてきましたが、これからは子育てを終えた夫婦2人の住まいにも注目すべきと思われます。この世代の夫婦2人の住まいに求められる要件を探るため、本調査は企画されています。

調査方法

ヘーベルハウス居住者への 大規模訪問調査と アンケート調査を統合

この調査は、訪問調査およびアンケート調査で構成されています。

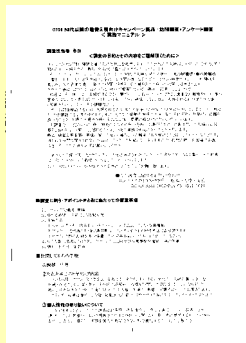
まず、営業担当による訪問調査で、家具レイアウトを記録し、リビングダイニングでの居場所とそこでしている行為をヒアリングしました。

さらに、奥様・ご主人様各々にリビングダイニングでの居場所に関する意識等のアンケートを実施しました。

上記2つの調査結果を統合して、分析を行っています。

< 訪問調査 >

営業担当 ヒアリングシート



家具レイアウト記録



< アンケート調査 >

ご主人用アンケート



奥様用アンケート



調査対象	ヘーベルハウス居住者で夫が50代以上の夫婦であり 家族に18歳以下の子がいない方	
調査時期	2006年7月～10月	
調査方法	<p>居住者訪問調査</p> <p>営業担当による ・家族構成・年齢 ・家具レイアウト記録 ・リビングダイニングの居場所と 行為のヒアリング</p>	<p>居住者アンケート調査</p> <p>訪問調査時に ご主人様・奥様双方に依頼</p>
調査内容	<p>リビングダイニングでの居場所・ 行為の実態 個室の所有状況・希望</p>	<p>リビングダイニングでの居場所・距離感 に関する意識 外出・来客頻度 趣味とそのため場所・アイテム</p>
調査数	271	
有効回答数	<p>223</p> <p>* 上記 が揃っており、次の条件に合致するものを有効回答数とした</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) ヘーベルハウスに居住している 2) 家族全員が19歳以上である 3) 夫が50歳以上の夫婦である (死別や入院等により配偶者と現在同居していないものは除く) 4) LDKを他の夫婦と共用していない(独立した二世帯住宅の場合を含む) 5) 両親、片親との同居を含む(同居の影響については別途考察する) 	

調査住宅 の 概要

総面積は100～160㎡が全体の6割

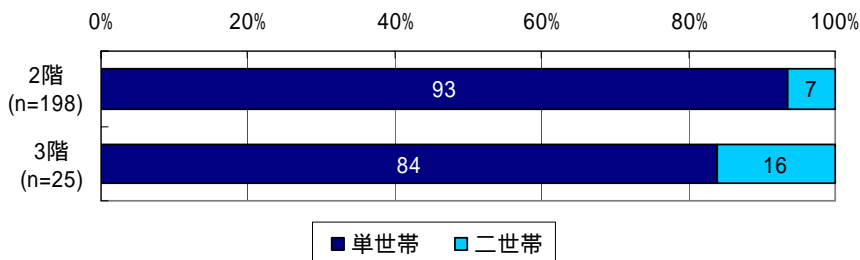
調査対象者はランダムサンプリングではなく、調査の目的に添って当該世代の単世帯住宅を中心に選定したものです。そのため居住形態比率や建物の規模等の分布はヘーベルハウス全体のそれとは異なるものとなっています。

建物階数と居住形態

2階、3階建ての別と、居住形態(単世帯、二世帯)は下記の通りとなっています。

当社では二世帯をキッチンが2つ以上あるものと定義しています。

3階建てで二世帯の割合が多くなっています。

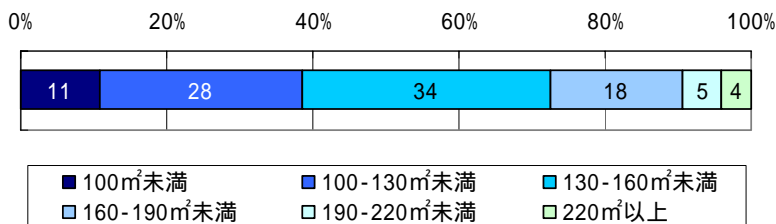


総面積

調査対象物件の総面積は、「130～160㎡未満」が最も多く(34%)、これに「100～130㎡未満」(28%)、「160～190㎡未満」(18%)が続きます。

従って、全体の62%を100～160㎡未満が占めています。

なお、平均値は143.3㎡、中央値は136.7㎡です。

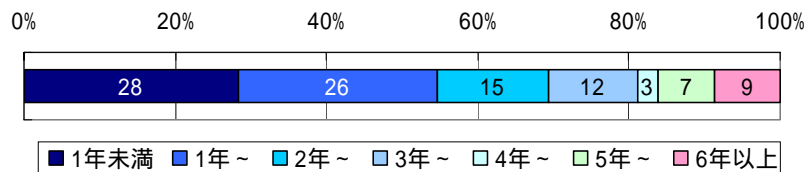


築年数

調査対象物件の築年数を見ると、約半数が「1年未満」または「1年～」です。

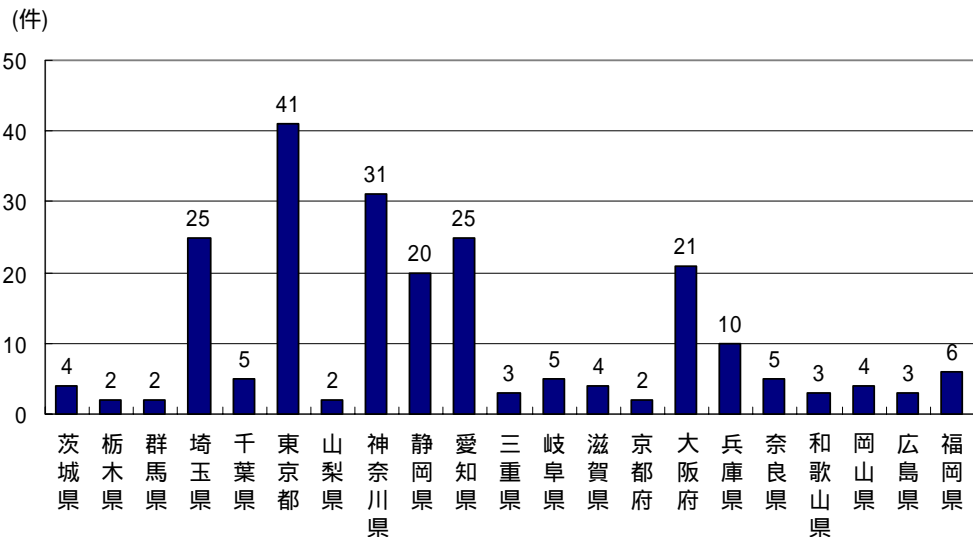
平均すると、築年数はほぼ2年です。

なお今回の調査では、築15年以上のお宅にも5件調査に伺っています。



地域分布

ヘーベルハウスの販売エリアである関東以西の太平洋側の都市部を中心に広く分布しています。都府県別では、東京都、神奈川県、埼玉県、愛知県の順に多くなっています。

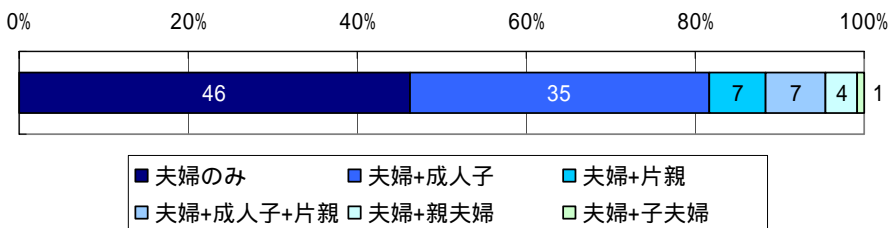


家族構成

子育てを終え、
夫婦2人での生活となった、
またはそれを意識している
世代の夫婦

家族類型

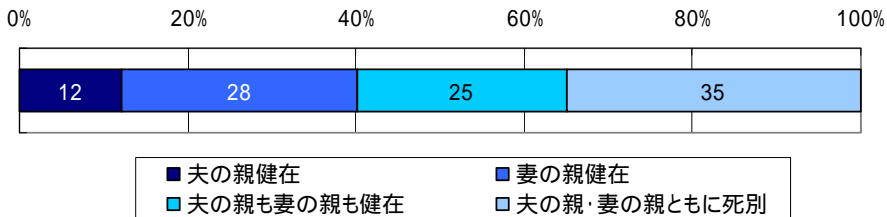
家族類型は、単世帯である夫婦のみ(46%)と夫婦+成人子(35%)にほぼ二分されます。その他は同居世帯(片親・親夫婦・子供夫婦)で、19%を占めます。第二章以降では、この家族類型の差について分析していきます。



別居の親について

夫側、妻側の親で健在な人がいるかを聞いたところ、全体の65%が少なくとも1人は親が健在であることがわかりました。

同居あるいは二世帯という人は少数だったことから、別居の親が多いということが指摘できます。



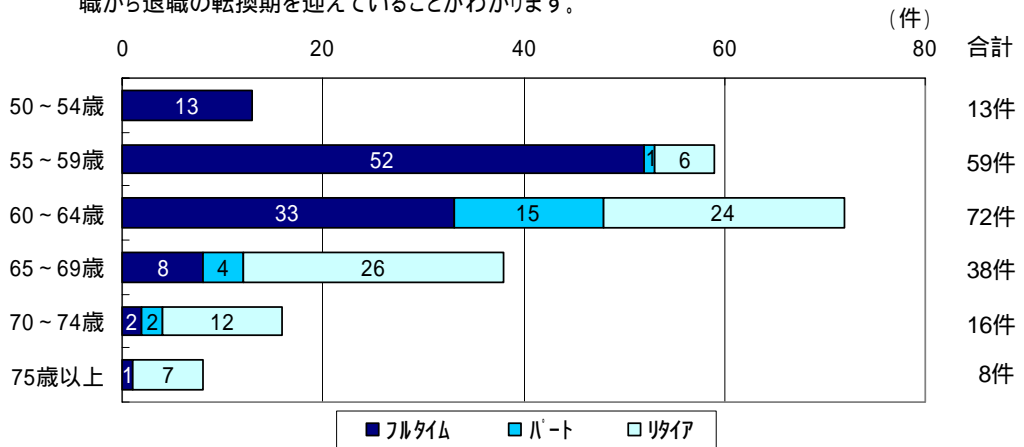
夫は60代半ばに退職を迎え、 在宅時間が長くなる

年齢構成 と 就業状況

ライフステージ

夫の年齢構成を見ると、60～64歳が最も多く(72件)、これに65～69歳を合わせると110件にのぼることから、60代が全体の大半を占めています。

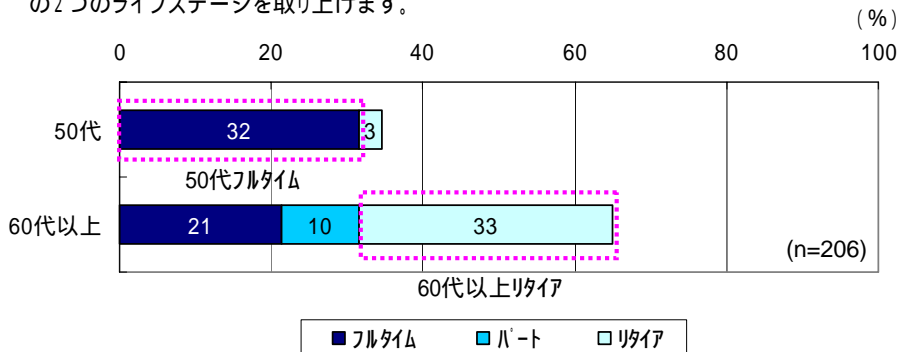
さらに、就業状況について見ると、60～64歳ではその半分以上がフルタイムで働いていますが、その次のステージの65～69歳になると過半数がリタイアとなり、60代の前半から後半に移るときに、有職から退職の転換期を迎えていることがわかります。



第二章以降の分析では、夫のリタイア前後の居場所や生活の違いを見るため、最も差が大きいと予想される

- 1) 50代フルタイム
- 2) 60代以上リタイア

の2つのライフステージを取り上げます。



第二章

リビング・ダイニングでの 夫婦の居場所と居方

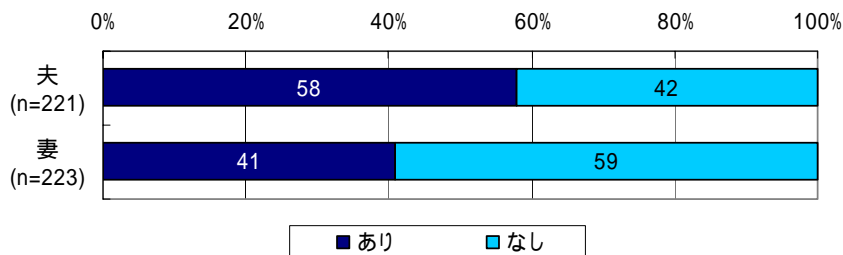
居場所

個室があっても
一緒にリビングダイニングに
居る方が多い

個室を持っている人は全体の半数

専用の書斎・個室の所有状況をご夫婦それぞれに確認したところ、
夫で58%、妻で41%が個室を所有していました。

専用の書斎・個室の所有状況

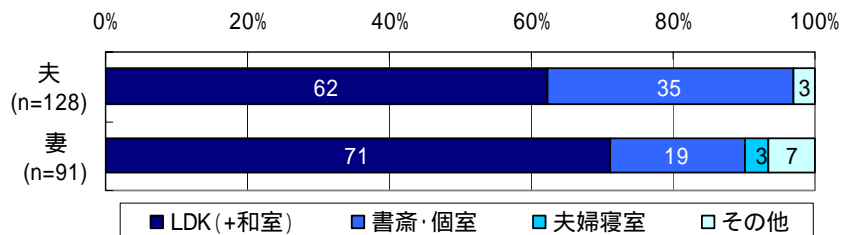


個室を持つ人の最も自由時間を過ごす場所はリビングダイニング

個室・書斎を持っている人でも、自由時間を最も長く過ごす場所がリビングダイニングの場合は、
夫で62%、妻で71%に及びました。

個室の有無に関わらず、リビングダイニングで如何に過ごせるかが重要となります。

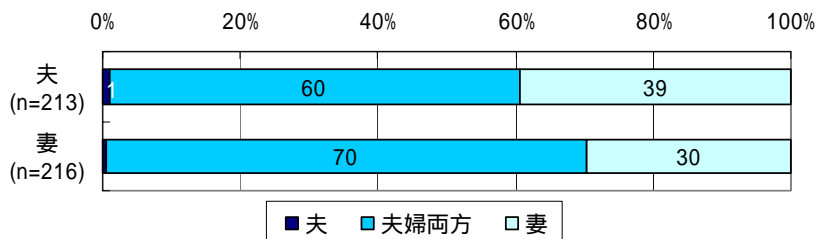
最も自由時間を過ごす場所



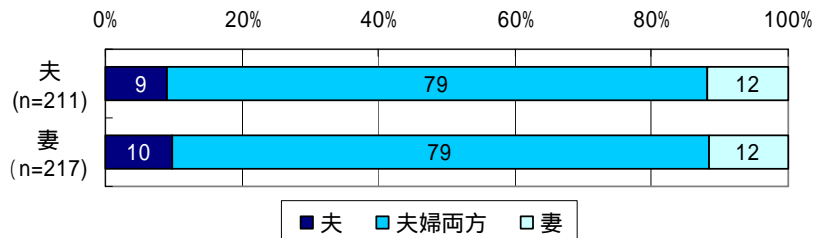
ダイニングは妻のテリトリー

ほぼ8割のご夫婦が、リビングを夫婦両方のテリトリーと考えているのに対して、ダイニングは、夫の4割・妻の3割が、妻のテリトリーと考えていました。

ダイニングは誰のテリトリーか



リビングは誰のテリトリーか



リビング の 居場所

自分専用の居場所で、 それぞれ別のことをして満足

リビングダイニングに自分専用の居場所がある人は6割
そこで、夫婦別々のことをして過ごす人が8割強におよぶ

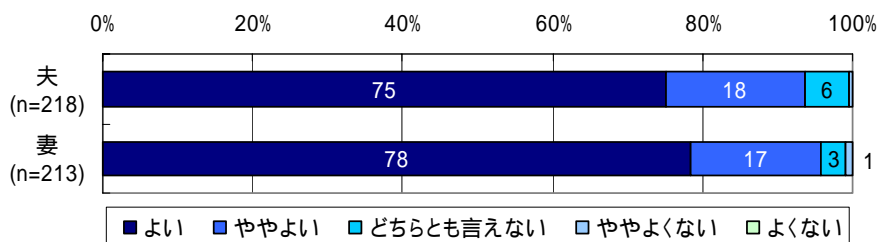
リビングダイニングでの自分専用の居場所のある・なし、および、ない場合の希望を確認したところ、平均ほぼ6割でした。妻の場合、現在ないが欲しいも含めると80%になります。夫の特徴として、退職後に専用の居場所を持つ人が増える傾向にあります。(53% 67%)
また、その所有率は、夫婦のみ・夫婦+成人子・夫婦+片親世帯での差はあまりなく、子や親の同居は、専用の居場所の有無にあまり関係ないことがわかります。
また、訪問調査の結果をみると、それぞれ別々のことをするときもリビングダイニングに居る夫婦が84%にのびりました。

居場所の居心地に満足している人が9割以上

今の居場所の居心地を「よい」としている人が、約8割、「ややよい」としている人を含めると9割以上になります。
リビングダイニングは、普通は、家の中でも環境条件のよいところに優先的に設けられ、個室に比べて広さもあるので、満足のいく居場所をつくりやすいと思われます。

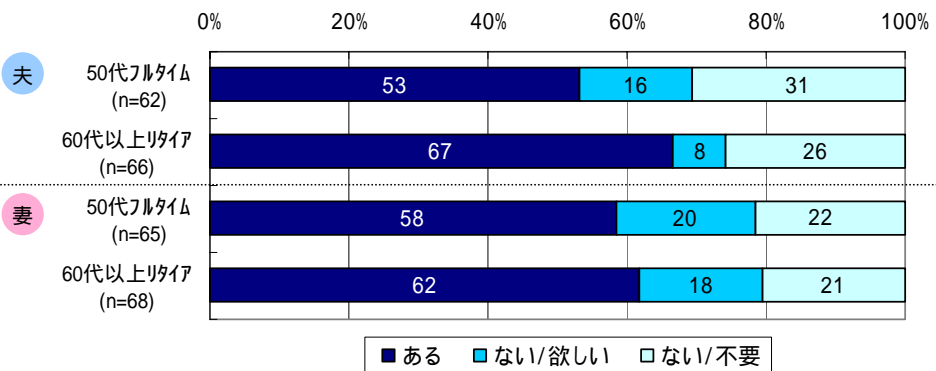
本調査では、その居場所の特徴を様々な視点から分析することで、居心地のいい夫婦の居場所を配慮したリビングダイニングのあり方を探ります。

居場所の居心地

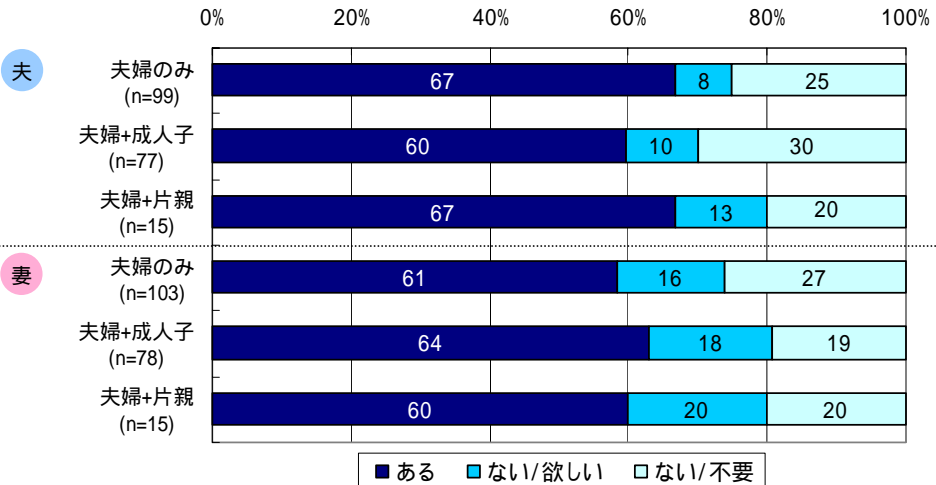


リビングダイニングにおける専用の居場所の有無と希望

< ライフステージ別 > *年代は夫の年齢で区分(以下同様)



< 家族類型別 >



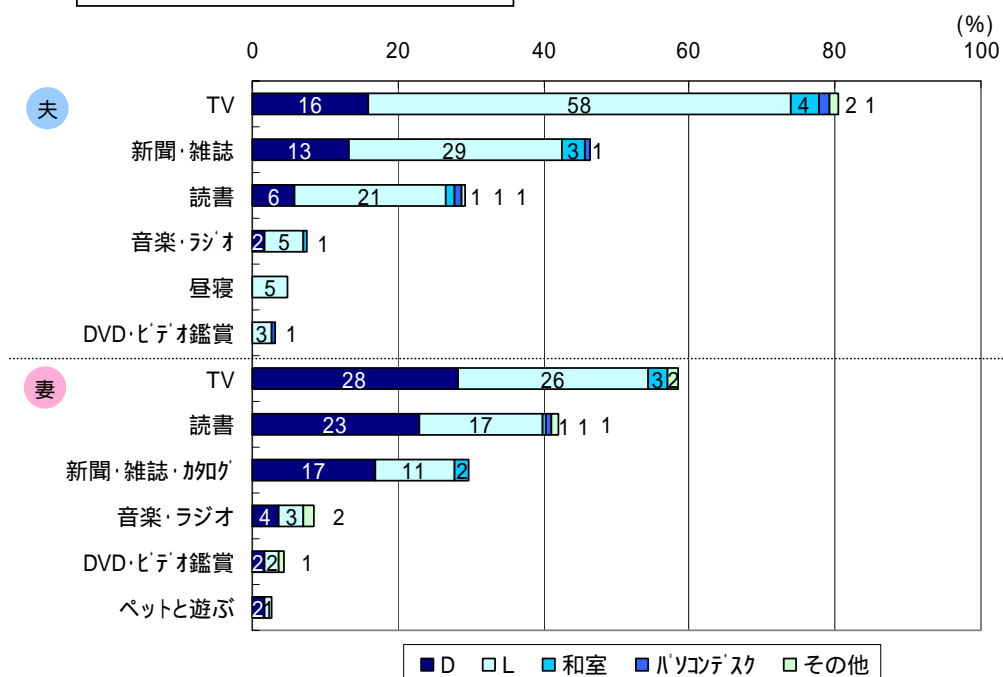
行為 の 分類

居場所での行為は、 くつろぎ系とはたらき系に 分けられる

夫婦共通でTV、新聞・雑誌、読書がベスト3

訪問調査にて、「別々のこと」の具体的な行為を聞いたところ、「TVを見る」「新聞/雑誌を読む」「読書」が、BEST3の行為でした。TVっ子第一世代が、如何にTVを好むかを物語っています。更に、抽出された行為は、その特性から、「くつろぎ系」と「はたらき系」に分けられると考えます。くつろぎ系は、いつ中断しても、終わらせても良い作業で、片付け等の作業もなく気楽です。一方、はたらき系は、きりがつくまでやりたいし、作業台や収納・必要な道具もあり、片付け・一時置きも発生します。内容的には、パソコンの普及、妻のはたらき系行為の多種多様さが特徴といえます。

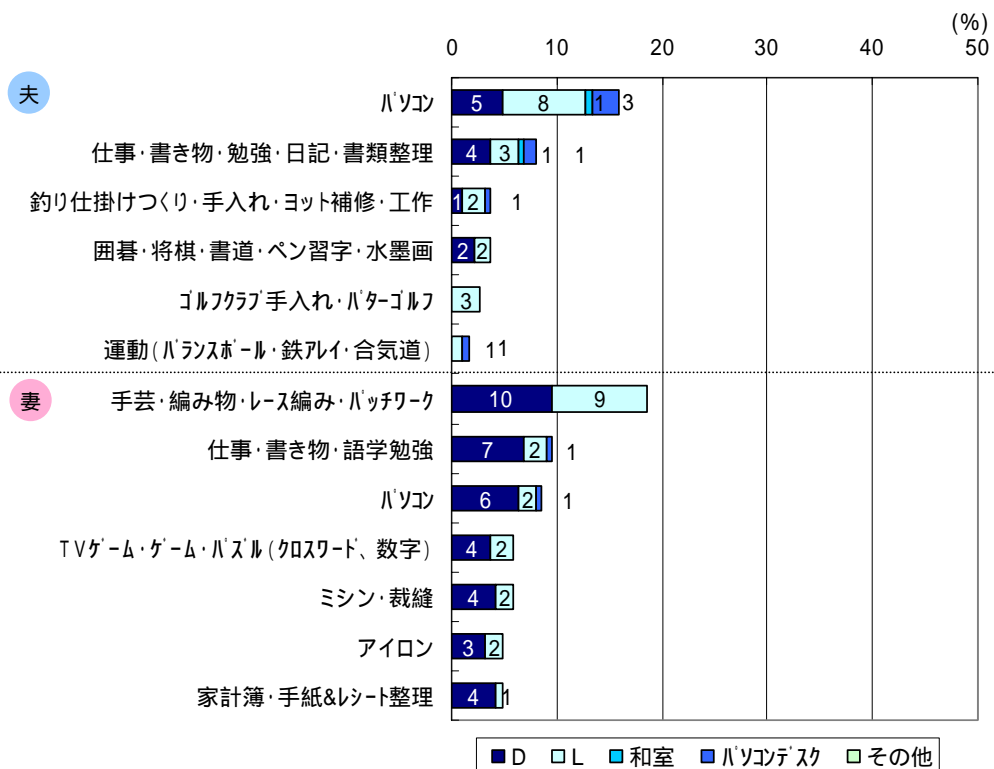
居場所でする行為：くつろぎ系



くつろぎ系はリビングで、はたらき系はダイニングが多い

くつろぎ系・はたらき系の各行為が、リビングダイニングのどこで行われているかを追跡したところ、くつろぎ系の行為の多くはリビングで、はたらき系の行為は、ダイニングで行われていることがわかりました。上記行為の特徴から、おのずと場所を使い分けていると思われます。

居場所でする行為：はたらき系



別々のこと

夫婦はこんなふうに別々に過ごす

夫婦一緒に同じ番組を見ているとは限らない

訪問調査では、調査員が、リビングダイニングにおけるTVの置き場所を図面に記載しました。その結果、17%の家庭でTVが2台置かれていることがわかりました。

「夫婦で見るTV番組が違うから」というのがその理由です。

ひとり楽な姿勢でTVを見るにはパーソナルチェアが最適

前者に加えて、居場所の家具(ソファ・テーブル等)も図面に記載してもらいました。その結果、40%の家庭でリビング(もしくは和室)に、パーソナルチェアが、置かれていました。リビングソファで一緒に過ごすより、ひとりで楽に寛ぐ実態の現れだと考えます。

別々のことをしながらもいっしょの空間にいることは大切

夫婦それぞれ、さまざまなことをしながらも、同じ空間にいる居心地の良さを述べたコメントが寄せられています。

自由記述回答より

・ある程度の距離は保つにしても相手の存在をいつも確かめられるところにいたいと思う。
とは言え主人は散歩好き、私はパソコン好き…(妻)

・私は家族、夫婦として暮らしている以上、何をするにしても、個室にこもってしまうというスタイルは好きではないので、お互いに邪魔にならない距離で同じ空間にいる暮らし方が好きです(妻)



夫婦 の 居場所

夫はリビング
妻はダイニング

リタイア前、夫の居場所の76%はリビング

リビングダイニングで「別々のことをしている」とき、最も長く居る居場所をヒアリングしたところ、夫の居場所は50代フルタイムでは76%がリビングであり、ダイニングはわずか9%とリビングに集中する傾向があります。60代以上リタイア層になると、ダイニングを居場所とする夫が増えますが、それでも59%はリビングを居場所としています。

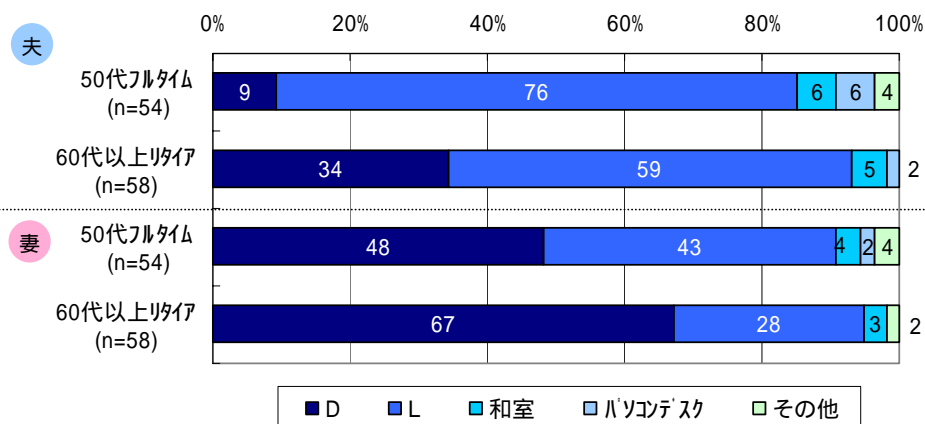
妻はダイニングを居場所にする傾向がある

妻は夫に比べてダイニングを居場所とすることが多く、50代フルタイム層では48%、60代以上リタイア層では67%に達しています。

リタイア後の居場所はダイニングが増加

50代フルタイムに比べ、60代以上リタイア層は夫妻ともにダイニングを居場所とする傾向が強くなります。

居場所の分布



居場所の位置関係は 主に3パターン

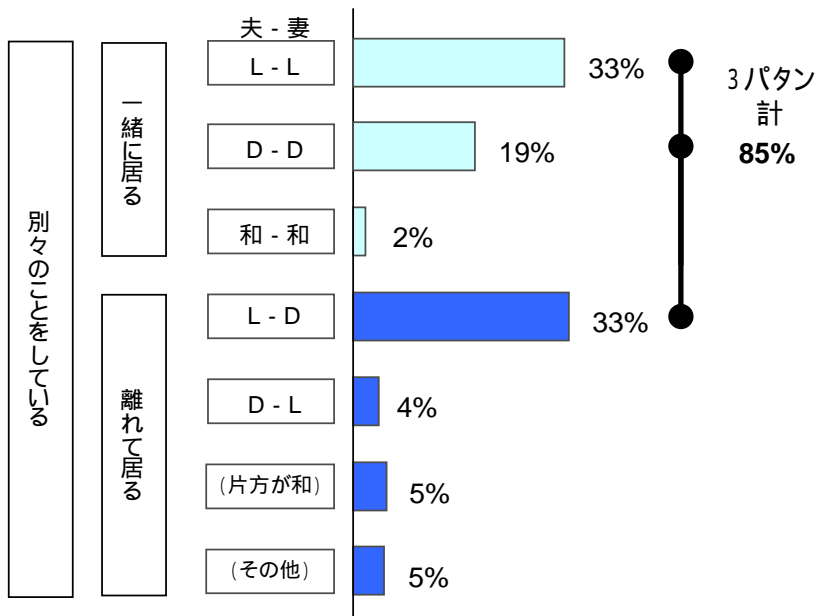
居場所 の 位置関係

位置関係は

- 1) 夫妻一緒にリビングに居る
- 2) 夫妻一緒にダイニングに居る
- 3) 夫がリビング、妻がダイニングに離れて居るの3種で85%

夫と妻の居場所の位置関係に注目して見ると、上記3つの位置関係に集約されることがわかりました。居場所を複数挙げている場合はこの3つの組合せであることが多く、この3種の代表的な位置関係について分析を進めます。

別々のことをしているとき、最も長く居る居場所



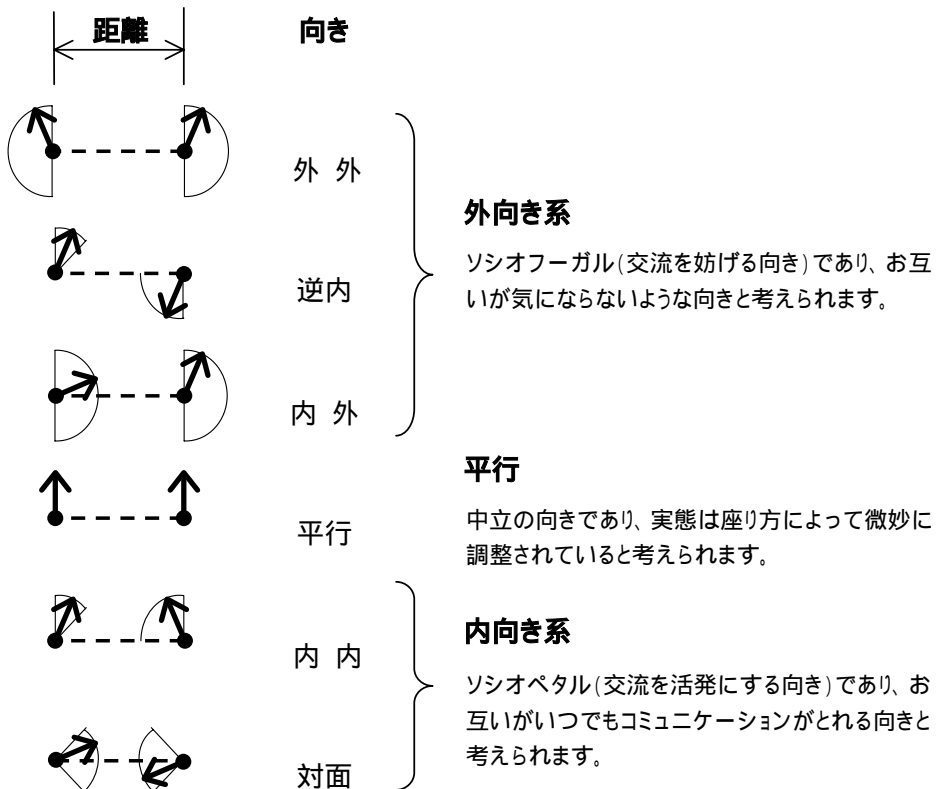


夫妻それぞれの居場所の 関係を分析

リビングダイニングに夫婦がどのように居るか、すなわち夫婦それぞれの居場所で行っている行為、居場所の位置、距離、向き等により生まれる関係を総称して「居方」と呼びます。

夫妻それぞれの居場所の位置関係を分析するため、訪問調査で記録された夫と妻の居場所相互の距離を測定しました。また、椅子の向き、または床座りの場合の顔の向きを同様に記録し、そのパターンを下記の6つに分類しました。

居方の距離と向きの分類



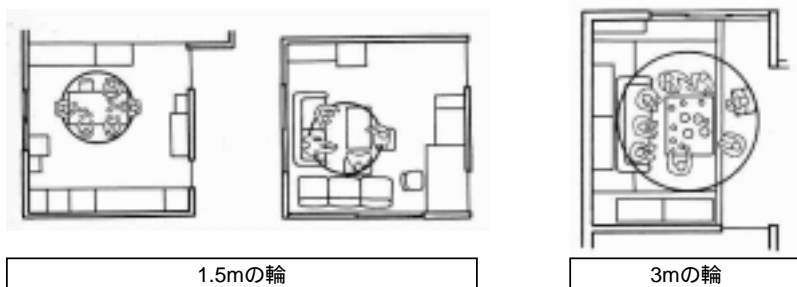
リビングダイニングにおける人と人の距離に関しては、以下のような既往研究があります。

ふたりの距離の意味 1.5mと3mの輪

住環境や生活の質が問題として議論される昨今ですが、多くの場合、問題にされるのは音、光、熱、緑といった物理・生理・自然環境ばかりであり、社会的な環境はしばしば忘れられています。人間は社会的な動物です。自分の周囲に他者がどのように居るかは、個人の生活を考える上で決定的に重要な環境要素といえます。こうした社会的環境を考える上で、一番基本的な尺度は人と人の距離です。人類学者エドワード・ホールは著書「かくれた次元」(邦訳 みすず書房)において、動物や人間にとって距離のとり方がコミュニケーションそのものであることを示しています。

西出和彦氏(東京大学)は、建築計画、環境行動研究の立場から、膨大な実験調査を通して、現代の日本人にとっての対人距離を、接触～排他域、会話域、空間共有域、相互認識域、識別域と分類・尺度化し、更に、住居における家族の居る場面(学生が自宅の家族の様子を記述したデータ)の分析にこの距離分類を摘要することによって、住まいにおける生活の場面を捉え、デザインする上での目安として、1.5mの輪、3mの輪という概念を提案しています。

1.5mの輪は、親密なコミュニケーションをするための人の集まりの輪であり、ダイニングテーブルやこたつに生まれるものです。これに対して、3mの輪は、会話域の上限(無理なく会話ができる限界距離)の輪であり、応接セットにゆったり座った状態などが典型的です。もちろん応接セットでも寄り集まって1.5mの輪が生まれることもあるし、こたつでも、各自が横になってしまえば3mの輪になります。我々は意識的あるいは無意識のうちに、住まいの中でこうした距離の使い分けをしているのです。



図出典:「環境と空間」高橋鷹志・長澤泰・西出和彦編 朝倉書店 p67

リビングで 一緒に居方

内-内向きまたは平行で 距離は1.5m程度

くつろいでいるときは、すぐ会話できる距離と向きに

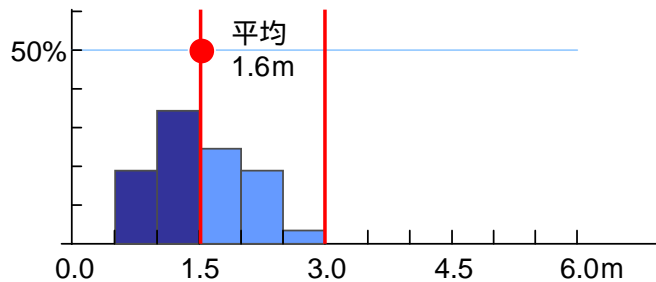
夫婦共にリビングで一緒に居るとき、その距離は1.5mを中心に分布しています。

向きも会話に適した平行～内向きが85%を占め、すぐにコミュニケーションがとれる居方をしています。

従来リビングに置かれることが多かった応接セットは会話が可能な「3mの輪」の中に配置されることが一般的ですが、それよりかなり距離は近くなっています。多くの場合はどちらかがTVを見ていることが多く、対面式のレイアウト例がほとんどないこと、TVの音がある中で会話するためには近い必要があることが理由として考えられます。

L - L

リビングで一緒に居方：
夫婦の距離と向き



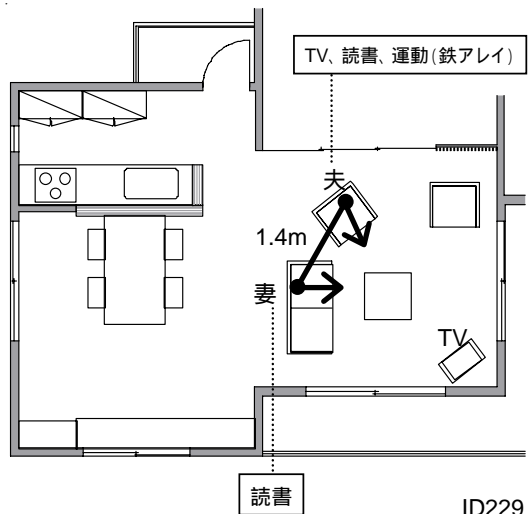
向き系	向き	割合 (%)	合計 (%)
外向き系	外 外	0%	外向き計 14%
	逆内	3%	
	内 外	11%	
内向き系	平行	29%	平行～ 内向き計 85%
	内 内	53%	
	対面	3%	

内-内向き 調査事例

ソファとパーソナルチェアがTVを囲むように並び、夫婦が内向きに座るリビングの典型例。夫がTV、妻が読書と別々のことをしながら、合間に会話することができるでしょう。

家族構成：
夫：61歳 パート週4日
妻：56歳 パート週5日

コメント：
(妻) 1mくらいの距離感がちょうどよい。仕切りたいとは思わない。話がしやすい。



ID229

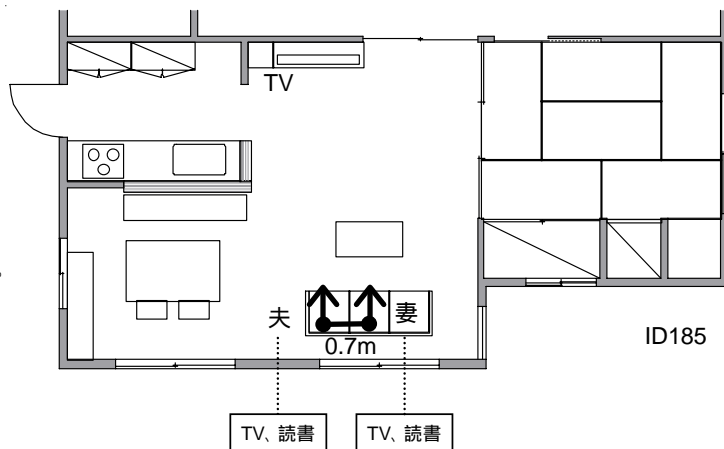
平行向き 調査事例

ソファに並んで座る例。リビング全体が大画面のTVを見るための居場所になっています。TVの位置がキッチンの脇にあるため、キッチンから廊下への家事動線はTVへの視線をすべて横切る形になっています。

家族構成：
夫：61歳 リタイア
妻：57歳 フルタイム
夫の母：86歳

コメント：
(夫) ソファが楽で、TVが見られるから、冷蔵庫も近く、便利だから。

(妻) 家事室が欲しい



ID185

ダイニングで 一緒に居方

対面で距離は1.5m以内

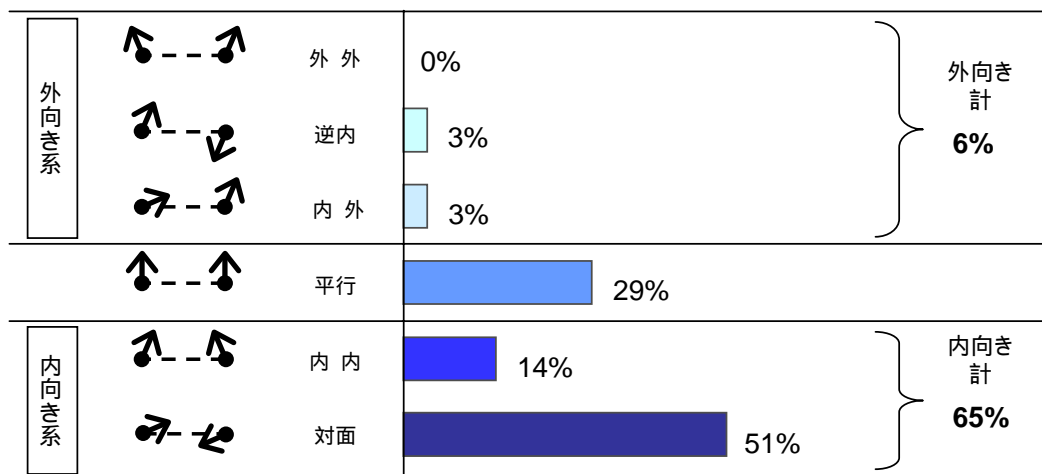
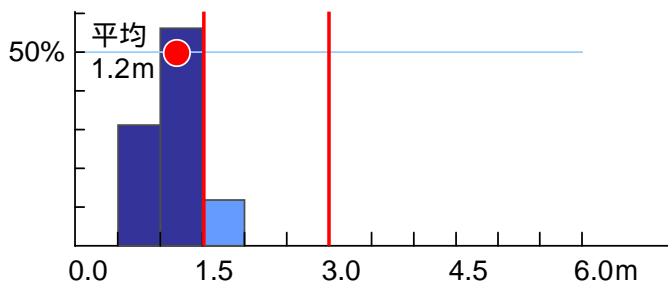
別々の作業を一つのテーブルで

はたらし系の行為が多いダイニングでも、リビングと同じようにすぐ会話できる距離と向きにいる場合が多いようです。ダイニングで一緒に居るときは、リビングより更に近く平均で1.2m程度の距離となっていますが、ダイニングテーブルの大きさである程度範囲が決まるためばらつきが少なくなっています。

リビングに比べ対面が多い理由はTVとの関係がリビングほど強くないこと、食事の席と同じ位置に座ること、作業スペースが広くとれることが推測されます。また、平行向きとなる理由として、TVとの位置関係が挙げられます。

D - D

ダイニングで一緒に居方：
夫婦の距離と向き



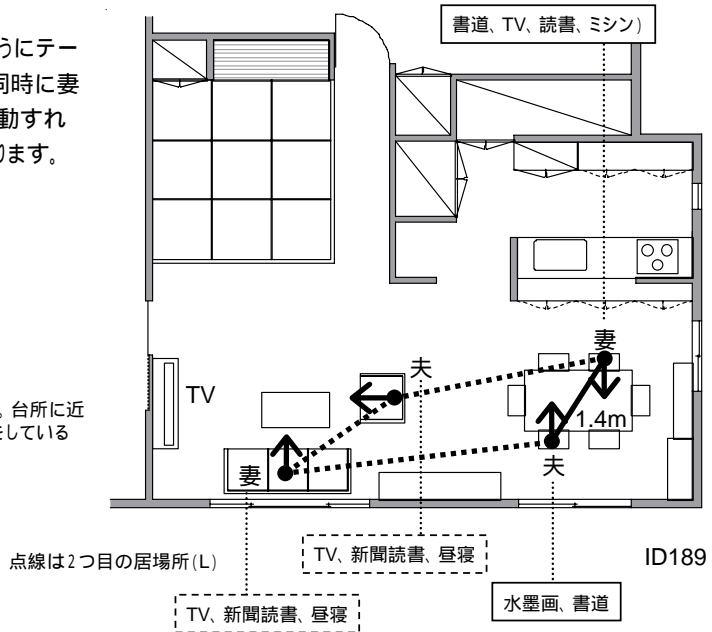
対面向き 調査事例

ダイニングに居て、書道のようにテーブルが必要な趣味をすると同時に妻は家事、TVも。リビングに移動すれば内向き系の位置関係となります。

家族構成：
夫：65歳 リタイア
妻：62歳 専業主婦
夫の母：88歳

コメント：
(夫)「書」を書きやすい。

(妻)この家における私の中心地点。台所に近く、テレビもみれるし、家の者が何をしているのかだいたい分かる場所です。

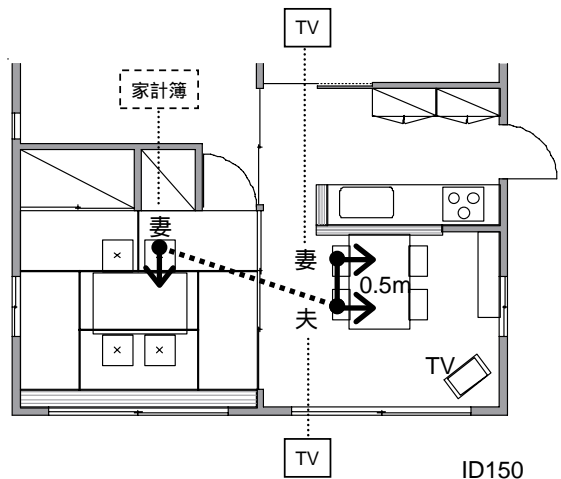


平行向き 調査事例

ダイニングがTVを見る場所となり「くつろぎ系」の行為が多くなるタイプ。家計簿などの「はたらき系」行為は和室に移動して行われています。

家族構成：
夫：63歳 リタイア
妻：57歳 パート週3日

行為：
(夫)TVのレイアウト上、一番見やすいから。
(妻)朝日が気持ちいいし、TVも見やすいから。



リビング ダイニング に離れる 居方

外向き系が増え、 3m以上離れる

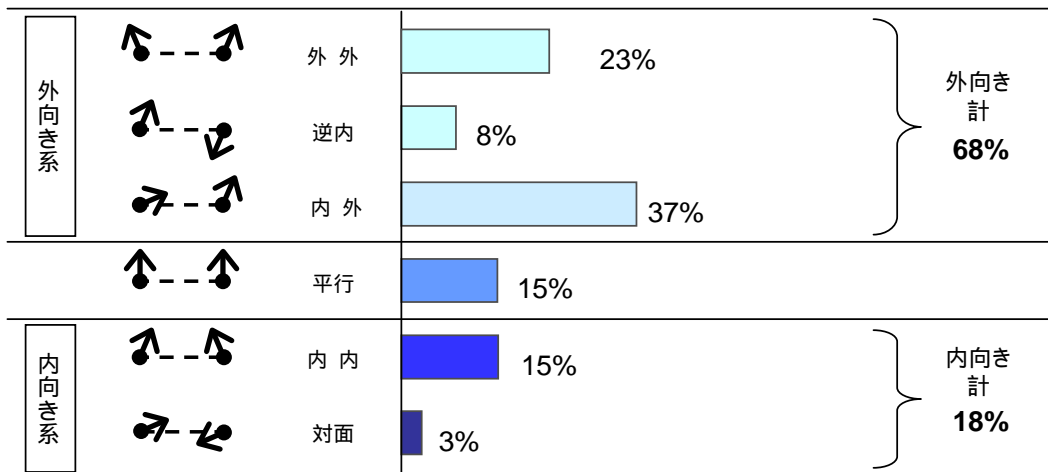
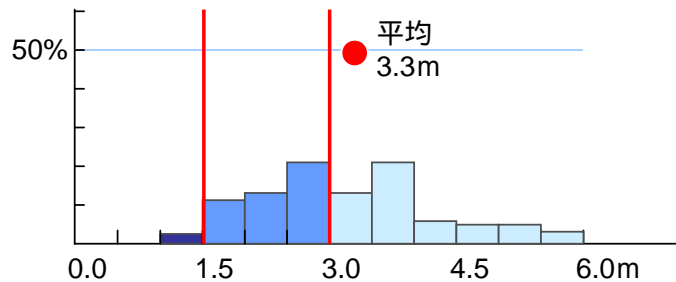
離れていれば、くつろぎ系とはたらき系行為が両立

距離は平均で3mを超え、外向き系が増えることが注目されます。夫がリビングにいる場合はTVを見てくつろいでいることが多く、その時妻はダイニングではたらき系の行為をしていることが多いことから、お互いの行為が気にならないような距離と向きを自然と選んでいるのだと考えられます。

ダイニング側で行われることが多い妻のはたらき系の行為は、くつろぎ系と離れていた方が快適と考えられますし、逆に妻が働いて居るそばではくつろげない、という感覚もあるのではないかと思います。内-外向きが多い理由として、ダイニングからでもTVが見られる方向を向く傾向が見られること、空間全体を見渡せるリビング方向を向くことが多いことが考えられます。

L - D

夫リビング-妻ダイニング
で一緒の居方：
夫婦の距離と向き

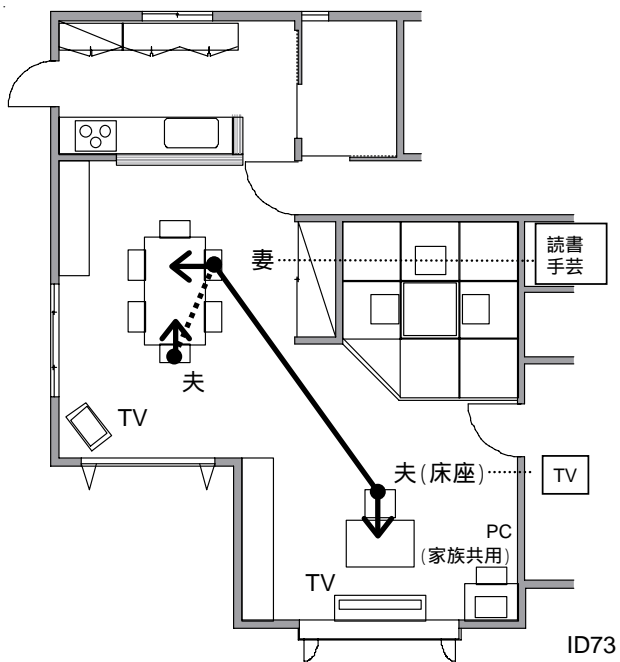


外 - 外向き 調査事例

リビング、ダイニングが離れていて、ダイニングで手芸などに集中できるようになっています。ダイニングにもTVがあり、くつろげるようになっています。

家族構成：
夫：57歳 フルタイム
妻：54歳 パート週4日
娘：27歳女子 有職

コメント
夫：空間が広くて庭園が眺められる



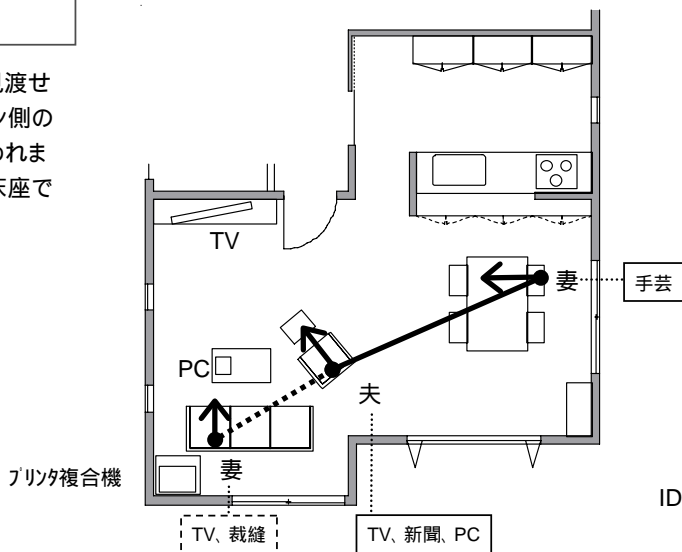
ID73

内 - 外向き 調査事例

妻はダイニングで部屋全体が見渡せる位置に座っています。キッチン側の収納は近く、便利であると思われる。パソコンはリビングにあり、床座で使用できるようになっています。

家族構成：
夫：70歳 リタイア
妻：63歳 専業主婦

コメント：
妻：キッチン、テラス(庭)が見渡すことが出来る



ID70

人間の感じている領域感、すなわち「近い」「遠い」という感覚については下記のような既往の研究があります。

コレ・ソレ・アレという領域

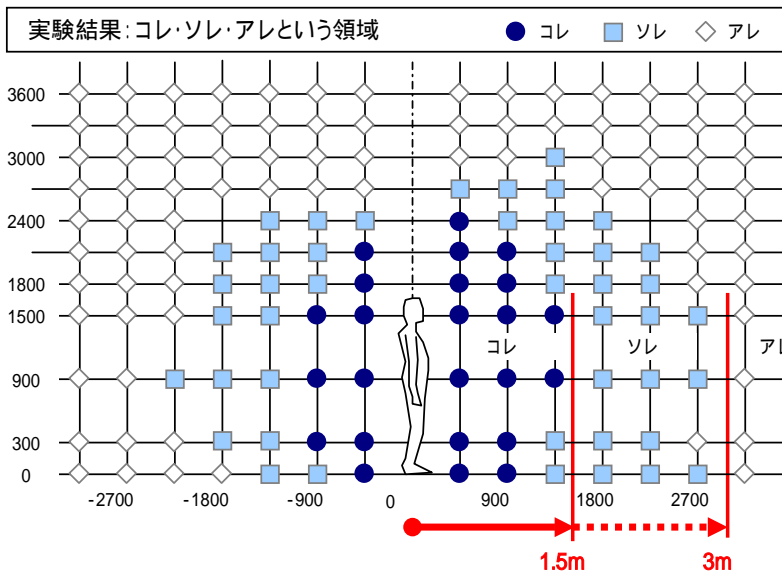
人間のまわりの空間を心理・行動の側面から意味づけを行い、領域化した研究に指示領域があります。指示代名詞コレ、ソレ、アレの使い分けは、話し手、指示する対象、話し相手の三者の距離、位置関係により行われ、それぞれの領域に分けることができます。これを指示領域と呼んでいます。

指示領域は、人間が空間をどのように認知しているかを知るひとつの「ものさし」として定義づけることができ、個人を中心とした空間の広がり、その実際の大きさなどを把握することができます。

十分な大きさと空間的な限定の少ない実験室(体育館)において、指示物の高さおよび指示物から被験者までの水平距離を変え、指示された物体(ボール)を指して、「何だろう?」、「はボールである」と言うとき、のところに指示代名詞コレ、ソレ、アレのいずれを用いるかを答えてもらうものです。

指示領域を断面的に捉えると図のように描くことができます。図で示されるように身体を中心にコレ、ソレ、アレの順に領域が分節され、それぞれが距離により「近い」、「中位」、「遠い」ものを指示することを示します。指示領域の形状は人間の目の高さでみると、コレ領域が1.0～1.5mの大きさ、ソレ領域が2.5～3.0mの大きさになります。

参考文献:「指示代名詞の使い分けによる個人空間の領域分節、その5次元空間についての検討3」;木戸将人、西出和彦他(日本建築学会大会学術講演梗概集1993年)



第三章

リビング・ダイニングの 居場所を決める要素

居場所 を決める 要素

居場所を決める要素は 距離、動線、収納、窓

居場所評価のキーワードは夫はTV、妻は外の眺め

アンケートで居心地評価の理由として書かれていた文章をキーワードの出現数で分析してみると、BEST5の項目は夫婦で共通しています。しかし1位、2位は夫婦で入れ替わっており、夫はTV、妻は外の眺めが1位となっています。

そこに居る理由は、TVが夫婦共に一位 妻ははたらき系の項目が上位に

訪問調査の際に、そこが居場所になる理由を合わせて聞いています。

居心地評価との違いとして、机・パソコン・作業といったはたらき系のキーワードが出現していることが挙げられます。また、夫においては、落ち着き、横になる、といったくつろぎ系のキーワードが特徴であり、妻においてはキッチンが近い、明るいといったはたらき系の行為に関連したキーワードが特徴となっています。

出現数	居場所の居心地評価の理由 (アンケート調査より)				そこが居場所になる理由 (訪問調査より)			
	夫 (n=179)		妻 (n=193)		夫 (n=217)		妻 (n=217)	
1位	TV	33%	外・眺め	40%	TV	52%	TV	29%
2位	外・眺め*1	30%	TV	37%	落ち着く	19%	キッチン・近い	17%
3位	落ち着く*2	20%	落ち着く	16%	机・パソコン・作業*5	16%	机・パソコン・作業	16%
4位	くつろぐ*3	13%	くつろぐ	14%	横になる*6	14%	明るい	16%
5位	新聞・本*4	9%	新聞・本	10%	外・眺め	12%	外・眺め	14%

*1: 外・眺め = (眺め・景色・庭・外・緑・花・木)

*2: 落ち着く = (落ち着く・快適・心地よい・気持ちよい)

*3: くつろぐ = (くつろぐ・寛ぐ・リラックス・ゆったり・のんびり・ゆっくり)

*4: 新聞・本 = (読む・新聞・本・雑誌など)

*5: 机・パソコン・作業 = (テーブル・PC・作業・書く・描く)

*6: 横になる = (寝る・横になる・ゴロゴロ)

居場所を決める要素として、距離、動線、収納、窓に注目して分析

以上のキーワードから、居場所を決める要素として、次の4つに注目したいと思います。

- 1) 距離: くつろぎ、落ち着きや見渡し、眺めのための居場所間の距離、向き
- 2) 動線: キッチンや家事動線との近さ、作業性、落ち着き感の分析
- 3) 収納: はたらし系作業や趣味のためのモノの収納の必要性
- 4) 窓: 外の眺めや明るさの必要性

自由記述回答より

TV: TVの正面、新聞を読む、お茶を飲む、居眠りができる、全てにおいて気持ちが良い(夫)

自分なりに満足しているのは、広い床にのんびりと足を投げ出し、本、TV・・・等。
心がワクワクしてしまいます(妻)

外・眺め: ソファから外の景色が眺められ、四季が感じ取れる(夫)

自分で選んだインテリア・調度品のあるリビングルームで、庭に訪ねてくる小鳥、そして自分の好みに
配置した木々や手がけた草花を眺めながらの時間が過ごせ、場所として最高(妻)

落ち着く: リビングの高い天井(吹き抜け)・広い折れ戸と続くテラス・白い壁面とダウンライト
= 理想に近い居心地(夫)

庭を眺めながら趣味のことが出来るのが心地良い!(妻)

くつろぐ: リビングが広くお気に入りのソファで、ゴルフ番組等を犬をひざに乗せゆっくりできる(夫)

リビングでは、話をしながら、テレビを見ながら、庭を眺めながら寛げる(妻)

机・PC・作業: 庭もテレビもパソコンも新聞も色々なものが揃っている場所(夫)

広いダイニングテーブルで本や新聞、その他小物が出すことができ、気がねなく作業が
できる(妻)

キッチン・近い: ダイニングはキッチンと近いため、色々な家事作業がしやすい(妻)

新聞・本: 読書などに最適だから。疲れたらそのまま横になれる(夫)

テーブルの上で新聞を読んだり、雑誌を見たりでき便利(妻)

距離

くつろぎ系とはたらき系の居場所は 3 m以上離せば両立

一緒に居るときは、会話ができる範囲に

前章のリビングダイニングでのL-L、D-D、夫L-妻Dという3種の位置関係の結果をまとめると、右の図のようになります。

一緒に居るときは、1.5m程度の距離で、内向き系が多くなっています。

別々のことをしているにもかかわらず、1.5m程度と近くに居ることで、いつでもコミュニケーションをとることができます。1.5mという距離は「コレ」と呼ぶ距離の上限にあたり、感覚的にも近くに居ることを示唆しています。

自由記述回答より

- ・夫婦2人の時間が多いので、リビングに2人でいて、別々のことをしていても、すぐに話せたり、くつろげる場所にしかたかったので、広さを充分にとって、ゆったりした空間にしました。(妻)
- ・寛く時は、夫婦共リビングのため、お互い別々のことをしていても気にならない。(夫)

離れて居るときは、お互いが気にならないように

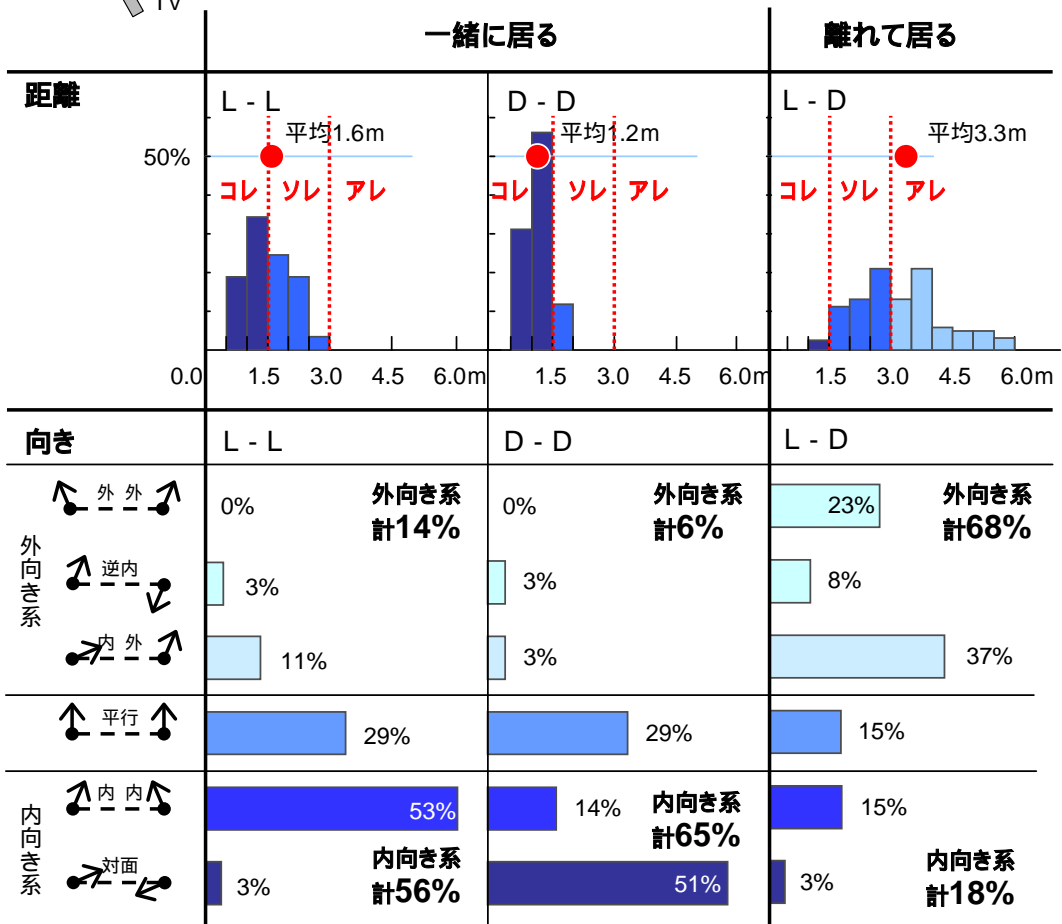
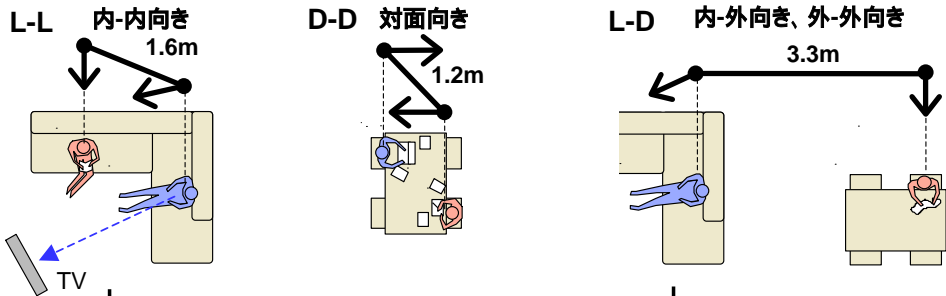
夫がリビング、妻がダイニングに離れて居るときは、距離が3mを超え、「アレ」の範囲に入ることが多くなります。一般に会話をスムーズにするためには3mの輪の中に入ることが必要とされ、その外になると会話には適さない距離になります。外向き系が多くなるのも、コミュニケーションを避け、離れていたいとの意識の現れと考えられます。

リビング、ダイニングそれぞれの中ではコミュニケーションがとりやすい内向き系のポジションがとれるような計画とし、リビングとダイニングの関係については3m以上離して外向きに居られるようにする、ということが夫婦2人で別々なことがしやすい距離と向きの要件と言えます。

自由記述回答より

- ・以前の家はリビングが仕切られていて狭苦しく、リタイアした主人と暮らしていたらお互いかなりストレスを感じていたと思います。LDKは広くなったことあるのですが、開放感があり風の通りもよく主人との距離が適度に保てるので平安でいられます。(妻)
- ・やや距離感の保てるほうが、お互いが気楽であると思う。(夫)

典型的な位置関係・距離・向き



動線

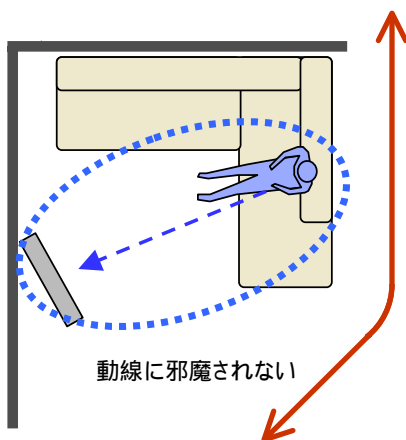
夫：妻の動線の外の落ち着ける場所
妻：キッチンに近く家事に便利な場所

夫の居場所は「妻の動線にじゃまされない位置」が8割
妻の居場所は「キッチンに最も近いダイニングの椅子」が6割

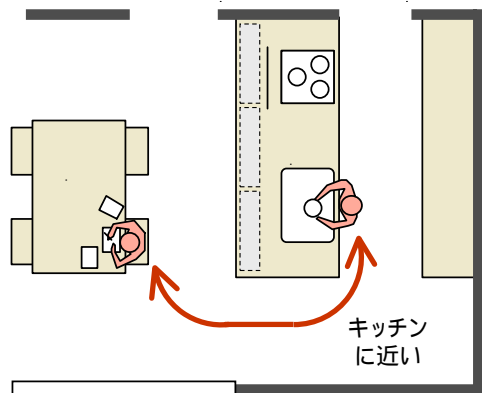
訪問調査で平面図に記載された居場所を分析した結果、下図のように、妻の居場所から、キッチン・洗濯室、玄関・階段に行く動線が、夫の居場所を横切らないケースが82%でした。多くの夫の居場所は、妻の日常の主要な動線の外にあるといえます。

一方、ダイニングテーブルを居場所にする妻(全体の半数)のうち、64%の人が、キッチンに最も近い位置に座っていました。キッチンを中心とした「ながら家事」がしやすい場所を自然に選んでいることがわかります。

夫の居場所・典型例



妻の居場所・典型例



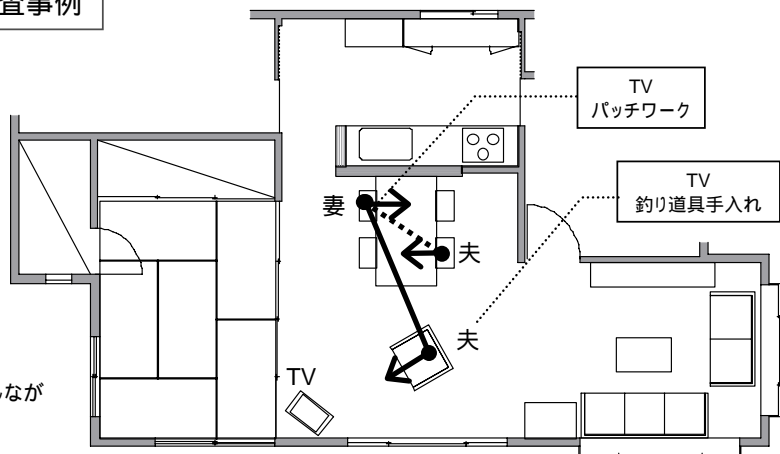
居場所から「室内を見渡せる」ことが必要

妻の場合、居場所で過ごしながらも家族や来客の様子をがわかれることが求められています。
妻の居場所は、いってみれば、家の司令塔なのでしょう。

「室内を見渡せる」調査事例

家族構成：
夫：62歳 パート週2日
妻：63歳 専業主婦
息子：32歳 有職
娘：27歳 有職

コメント：
TVを見ながら、料理しながら、
パッチワーク等趣味の仕事をしながら、
部屋全体を見渡せる（妻）



収納

居場所の近くに収納を

居場所にはさまざまなものがある

アンケートに記入頂いた「居場所に置いているもの」を抽出したところ、この世代の暮らしぶりや、興味の対象がどんなものかを確認することができました。

趣味用品は多岐に渡り、その関連書籍の持込が多くみられました。

今回目立ったのは、脳トレーニンググッズや運動用具です。この世代の若さ・健康への関心の高さがうかがえます。

夫

本、書類、パソコン用具

本、新聞

書類、手紙、OB会連絡網

パソコン、デジカメ、携帯電話

ラジオ、DVD

釣り道具、ゴルフクラブ

将棋、囲碁、

工作道具、習字道具

ウクレレ、鉄アレイ

妻

ながら家事道具と趣味の道具

本、新聞、チラシ広告

はがき、家計簿、帳簿

パソコン、携帯電話

ラジオ、カセット、CD

食材、花、お菓子、飲み物

小型ゲーム機、パズル

アイロン、洗濯物

ミシン、糸と針、パッチワーク、編物

書道道具、手芸の道具、トールペイントの道具

バランスボール、ヨガマット

居場所への要望：収納は手近に欲しい

アンケートに自由に記入頂いたコメントの中には、「居場所の近くにモノが置いて便利」「専用の収納は欲しい」という意見もよせられました。

自由記述回答より

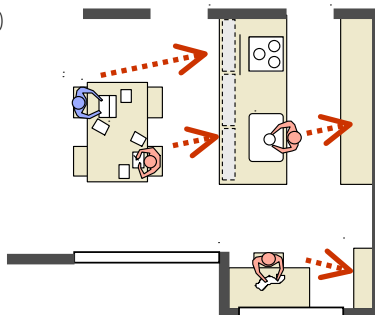
<手近に置いて便利>

- ・リビングのソファから、ほとんどすべて日常良く使用するものを手軽に利用できる。(夫)
- ・ダイニングテーブルのまわりにTV・新聞・趣味の物など必要なものが手近にあり、家事や用事などでの動線的に良い場所。(妻)

<収納欲しい>

- ・PC操作を趣味としてはじめたが、スペースが狭く十分な備品(本立て、紙類保管場所、資料収納スペースなど)の整理に不便を感じている。もっと予算があり、書斎コーナー的な空間を広く取れば良かった。(夫)
- ・テーブルの上に新聞・雑誌・広告・鉛筆・消しゴム・ボールペン・帳面・携帯等が山積みになってしまう。人が来る時など置き場に困る。(妻)
- ・リビングのテーブルの上に手芸用具を広げると食事する際、片づけがめんど。(妻)
- ・収納スペース…長く居る部屋には何かと物が集まります。毎回使うだけに片付けるのがめんどになり、そのまま出ます。身近に小物が収納できると便利ではないでしょうか(年々ものぐさになってます)。(妻)

居場所のそばにある収納(概念図)



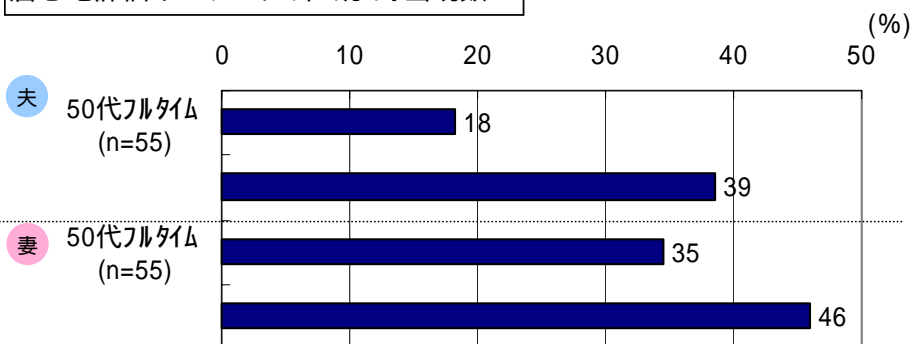
窓

居場所から外が眺められる窓を

リタイアを迎える頃、夫の居場所からの「眺めの関心」が高まる

前述のアンケートによる居心地評価のキーワード出現数にもう一度着目します(P.41)。この世代にとって絶対的な「TV」に並んで「眺め」の出現が高いことがわかります。しかも、下記のように、50代フルタイム層に比べ、60代以上リタイア層の「眺め」への関心が、かなり増加するのは、興味深い結果です。

居心地評価キーワード「外・眺め」出現数



自由記述回答より

- ・ソファからベランダの花・木が眺められるように家具を配置している。(夫)
- ・丹精こめて育てた庭・家庭菜園が眺められて心地良い。(夫)
- ・開放感のあるリビングや庭を横になっても眺められる。(夫)
- ・フォールディングウィンドウのため、リビングのソファから眺める庭の開放感が気に入っている。また、閉めている時も明るく気持ちが良い。(夫)
- ・折れ戸を開けると、気持ちいい風が通り抜け、広いテラスの花がゆらいているのを眺めるのが大好きです。(妻)
- ・庭の見晴らしがよい。特にウッドデッキの見晴らしがよく、小鳥がよく来るので観察している。(妻)
- ・愛犬と庭を眺めながらまた本を見たりのんびりと過ごすことがなんともいえません。(妻)
- ・ベランダに好きな植物や花を置き、眺めている時が、本当にうれしく思う。(妻)



居場所 の 4要素

いい居場所にするための の要点

距離:くつろぎ系とはたらき系の居場所は3m以上離し、外向きに

リビングダイニングでは、夫婦が別々のことをしながらも快適に暮らすことが求められます。リビング、ダイニング各々で別々のことをしていてもコミュニケーションがとりやすい1.5m程度の内向き系の居方と共に、リビングとダイニングに離れているときはお互いが気にならないよう、3m以上離れて外向き系の居方ができると必要とされる傾向があります。

動線:夫は落ち着き、妻は動きやすさ

夫は居場所に求める落ち着き、くつろぎといった要素を求め、妻の動線から外れた居場所となる傾向があり、妻は居場所にキッチンとの近さ、家事動線の便利さを求める傾向が見られました。

収納:居場所で使うものの出しっぱなしを避け、すっきりらせるように

居場所で使うものは家事、書類、趣味の道具等多岐に渡り、それらと近くて便利なのが居心地の良い居場所の条件となる傾向が見られ、収納やモノの置き場は居場所にとって重要であることが示されました。

窓:眺め、明るさ、風通しのいい場所を居場所を選ぶ

その場所に居る理由として、外の眺めや明るさは大きな要素であり、この傾向は夫妻とも共通して見られました。窓の位置や大きさの計画が居場所にとって重要であることが示されました。

第四章

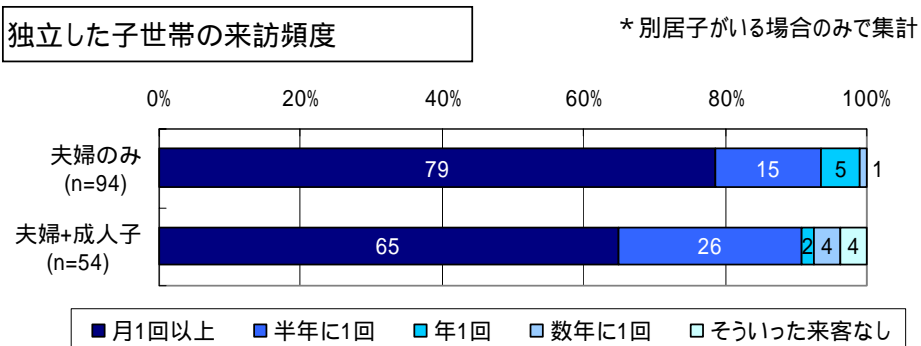
来客と外出・ 個室の役割

来客

交流がしやすい家であってほしい

夫婦にとって、独立した子世帯も「よく一緒」の拡大家族

独立した子世帯の有る世帯において、子世帯が家に来る頻度は、74%に及びます。
別居ながらも、気持的には一緒。食事・歓談をしながら楽しく集う様子がうかがえます。



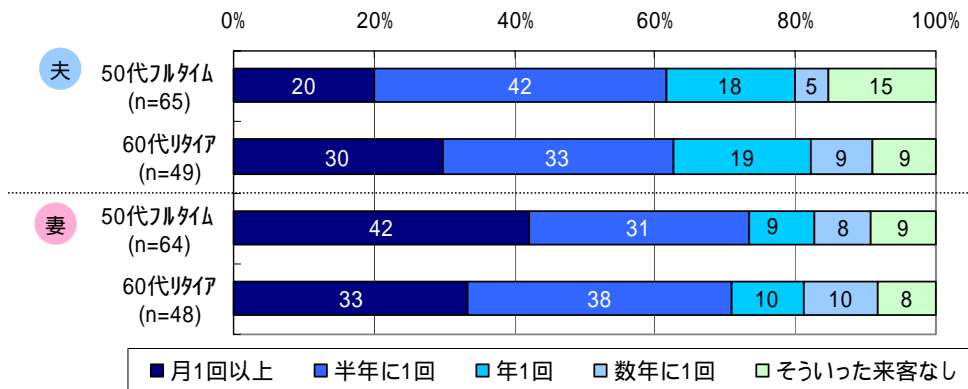
友人の訪問はライフステージが上がると夫は増加・妻は減少

友人の来客頻度をライフステージと家族構成で比較します。60代リタイア層は、夫の友人の訪問頻度は増え、(20% 30%) 逆に妻の場合は、減少する(42% 33%)ことがわかります。
また、夫婦のみ世帯の方が、成人子供との同居世帯より、友人の来訪が多いことも見てとれます。気兼ねないことが、友人の訪問を増やすようです。

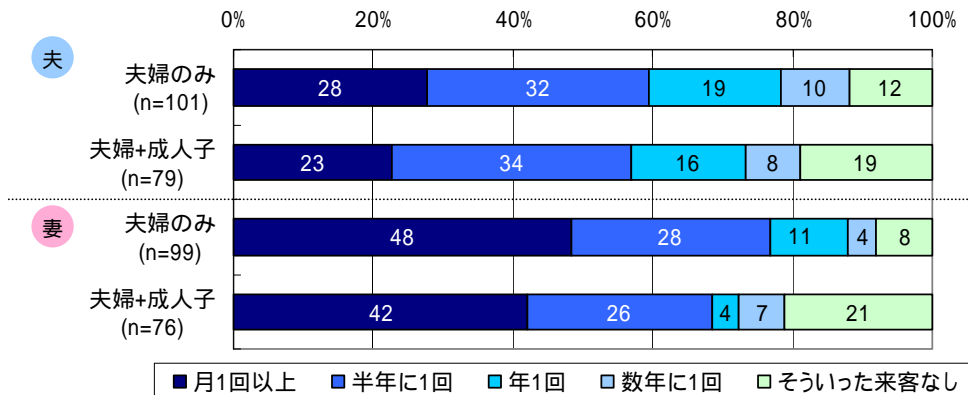
友人の来訪頻度

< ライフステージ別 >

* 夫が60代の場合で集計 (70代以上を除く)



< 家族類型別 >



個室 の 使い方

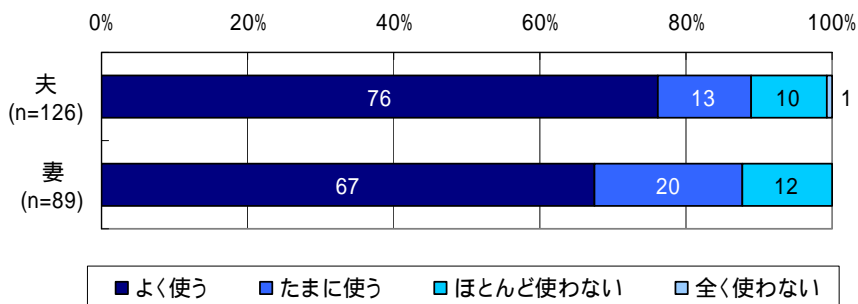
独立性が必要な行為がある

個室も7割の人がちゃんと使っている

個室は、対象者の約半数が持っていたことは前述しましたが、その内、夫の76%、妻の67%がその個室をよく使っていました。

それをどのように使っているかを、訪問調査の聞き取り、及び、プレ訪問調査(開発担当者により20件実施)から抽出しました。その結果、仕事や専門化した趣味を集中して行う場合は、個室でする傾向がみられました。合わせて、喫煙やCDを聞くなど、空間を共有しづらい場合も、個室が使われる傾向にあります。

個室の使用頻度



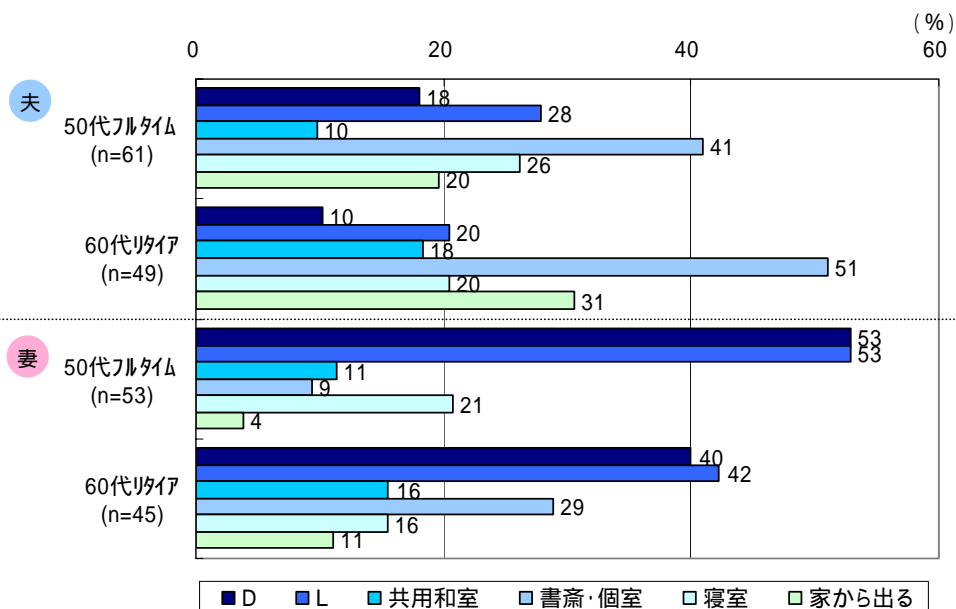
配偶者の友人が来訪の時、個室が有効

配偶者の友人が訪問した時、自分(本人)は、どこに居るかを尋ねたところ、夫の場合は、個室/書斎に居るケースが最も多く、60代リタイア層は、50代フルタイム層に比べて更に増加することがわかりました。(41% 51%)。

妻の場合も、相対的にはLDがおもな居場所ながら、60代リタイア層は、個室/書斎に居るケースが増える傾向にあります。(9% 29%)

配偶者の来客時の居場所

* 夫が60代の場合で集計(70代以上を除く)
(複数回答)





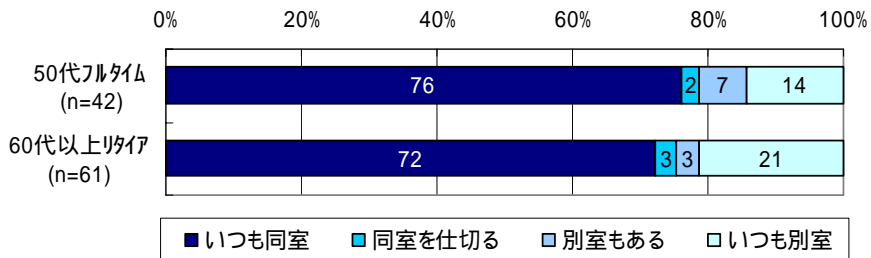
夫のリタイアで 夫婦別寝室傾向

妻の報告によると・・・

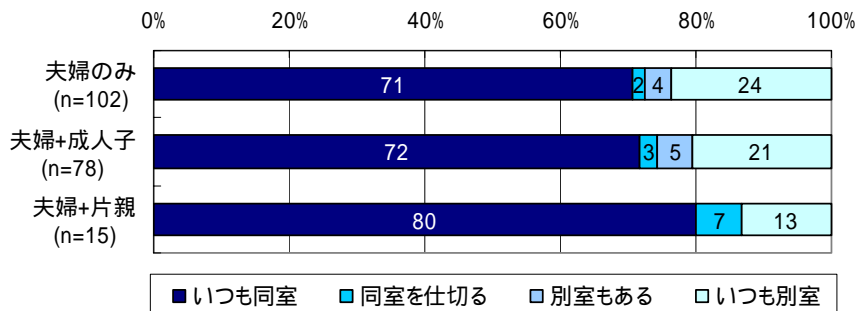
夫退職の60代、別寝室の割合が最も高く 3割

50代フルタイム層に比べて、60代以上リタイア層は、いつも別室の割合が増加します。
 (14% 21%) また、夫婦のみ世帯(子供が独立し、個室が空くことが考えられる)と夫婦+成人
 子世帯の別寝室の割合は、さほど違いがありません。
 子供の同居・非同居は夫婦の別寝室に、さほど影響を与えないと思われます。

<ライフステージ別>



<家族類型別>



介護を踏まえた将来の備えに 関心が高い妻

加齢配慮

超高齢の親との同居、自分達の老後の備えを憂慮する多くの声

アンケート自由記述回答の中には、介護を要する親との同居や、自分達の老後の車椅子対応等、寝室を中心とした加齢配慮を望む声が、かなり多く寄せられました。

自由記述回答より

老後を考えて住まいを提案して頂いて、我家はバリアフリーにしたり、自動シャッターにしたりしました。70代を考えて、これからもっと身体にやさしい家を提案して行って下さい。(妻)

これからもっと年老いていくと一階で生活する方が楽になるし、介護が必要な時は和室を低価格でフローリングにできるか検討しておきました。余裕がある場合は1Fにゲストルーム的な部屋をとり、介護の時に使うのも一案だと思います。(妻)

バリアフリーは必ずして欲しい。全て明るくする。車椅子の通れる廊下、トイレ等。毎日の生活がゆったりとできるように、本人の希望を取り入れ老後を楽しく過ごせる提案をしてください。(妻)

車椅子の母のためにエレベーターを設置したが、自分も荷物の上げ下ろしなどで大変重宝している。初期投資は大きかったが、後でできないので今は本当に満足している。(妻)

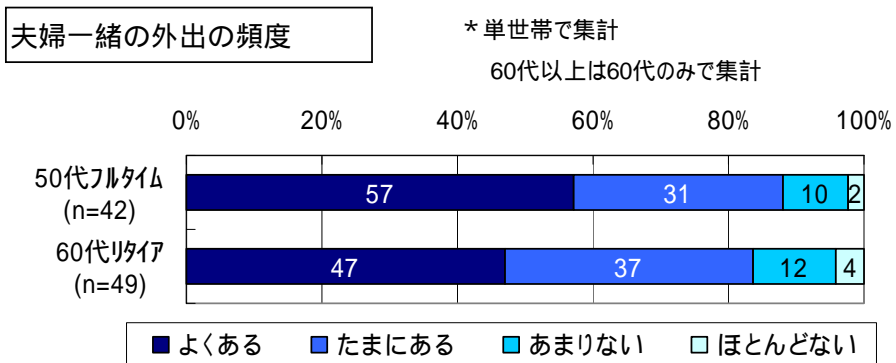
設計時、リビングにトイレ、洗面所の配管 ベットを置き介護出来る様にさせていただいたことに老後の備えとして安心しております。(一部で全部生活出来るのがよい) (妻)

外出

夫婦ふたりでよく外出 妻はひとりでもよくお出かけ

半数の夫婦がよく外出。ただし、リタイアするとやや減少する

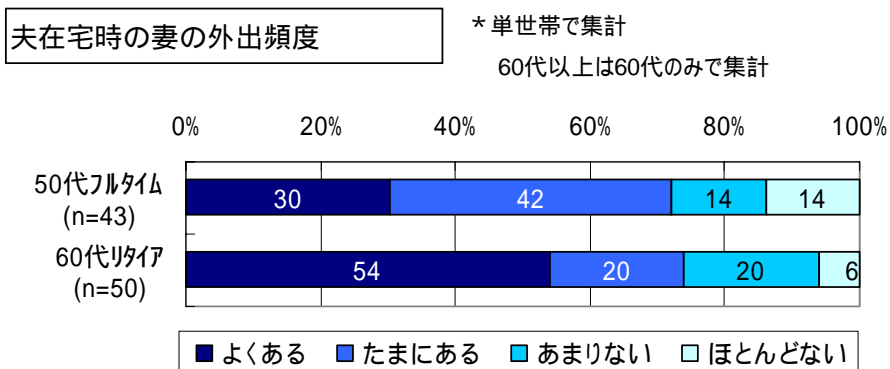
夫婦一緒の外出頻度を尋ねたところ、ほぼ半数の夫婦が、よく一緒に外出していると回答いただきました。但し、50代フルタイム層に比べて、60代リタイア層は、「よく外出する」割合が減少します。増えた自由時間は、それぞれ自由に使われていることが垣間見えます。



夫が在宅の時に、外出することがよくある妻はほぼ半数。 夫がリタイアの時期には、更に増加

夫が家にいる時、外出する頻度を妻に尋ねたところ、全体のほぼ半数の人が、「よくある」ようです。更に、50代フルタイム層と、60代リタイア層で比較したところ、よく外出する人が、30%から54%に増加することがわかりました。

夫の生活時間にとらわれず、趣味・交友等にアクティブに行動する妻の様子があがります。



夫の家事

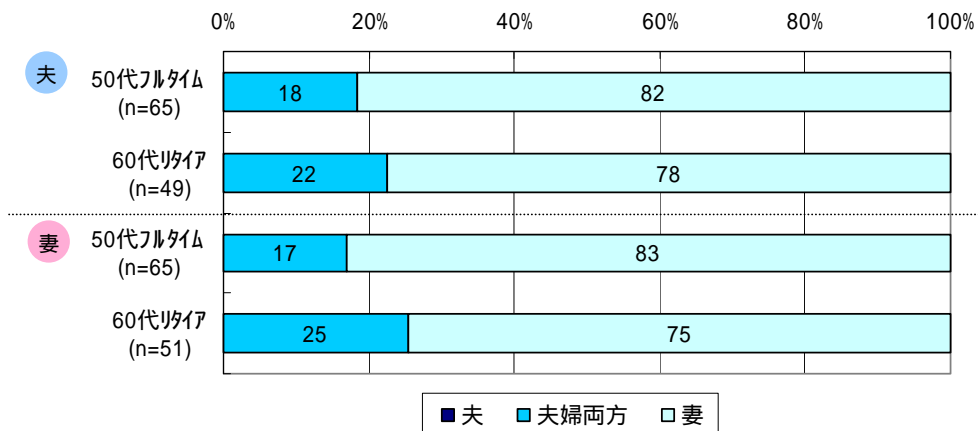
まだ夫の家事は少ないが、
ちょっとずつキッチンに入る段階

それまで妻の牙城であるキッチンを夫婦の領域と考える夫が2割に

キッチンが誰のテリトリーかとの問いに対して、60代リタイア層の22%の夫・25%の妻が、「夫婦両方」と回答しています。

家事参加とまではいきませんが、妻の留守中に、キッチンに足を踏み入れることが徐々に増えるなど、家事に目がむく夫、それを期待する妻の様子がうかがえます。

キッチンは誰のテリトリー



本調査の意義

本調査 の 意義

大阪大学大学院工学研究科 地球総合工学専攻
助教授 鈴木 毅

「子育てを終えた夫婦2人の居場所」と題されたこの調査報告書は、現代日本における住宅研究として極めて意義深い成果である。以下簡単であるが、調査研究自体についての3つの意義と、調査によって明らかにされた成果に関する3つの意義を説明したい。

夫婦2人の居場所としての住居に焦点をあてた調査であること

従来、住居の問題は家族の問題として語られることが一般的であった。そこでは家族は基本的に一体のものと考えられるか、あるいは、夫婦対子ども達、親世帯対子世帯、家族対訪問者のように、居住者個人ではなく、世帯・家族内のグループ相互の関係が重視され、それに対応した空間や領域をどのように構成するかが議論されてきたのである。これは高度成長期以来の核家族に対応した議論といえる。しかし、今状況は変わりつつある。団塊の世代が定年を迎え確実に増加する子育てを終えた夫婦の住宅においては、夫と妻という個人個人が住まいの中にどのように各々の居場所と関係をつくるかが重要な課題となる。核家族に対応してnLDKという形式が生まれたように、ここから新たな住居のあり方が誕生する可能性があるのである。

多くの世帯を対象とした住まい方実態調査であること

今回の研究が、少数のインタビュー調査やアンケート調査でなく、200世帯以上を対象とした実態調査に基づくものであるのも極めて意義深いことである。居住の現場で住まい方を調査し、それに基づいて住居の課題を分析しプランを提案していくことは建築計画研究の原点とも言える方法論である。けれども、元々、建築計画分野では公共性の高い集合住宅を対象とした調査が多いこと、またプライバシー意識の高まりに伴う調査の困難さから、近年、我が国における、現代の戸建て住宅を対象とした一定規模の住まい方調査は実はあまり多くない。こうした状況の中で、今回の調査報告は、現代日本におけるリアルな住まい方調査として価値が高い。

住居における具体的な人の「居方」に注目した調査であること

加えて、今回の研究が、住居における夫婦個人個人の具体的な居方を調べていることは更に貴重で意義深いことである。一般の住まい方調査では、誰がどの部屋で寝るか、どの部屋で食事をするかというように、人と部屋、行為と部屋の対応関係までが調査項目であって、居住者が部屋のどこに座っているのかという具体的な場面の様子は調べられないのが普通である。これに対して本調査では、顧客に信頼を得ている営業マンの力を借りることによって、住まいにおいて、実際に夫婦各々がどこにどのような向きで座って、何をしながら何をしているかという、これまでほとんどデータがなかった実態を明らかにしていることは特筆すべきである。

参考文献

鈴木毅「人の居方からの環境デザイン」建築技術、1993.7～1995.12

鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」(舟橋國男編「建築計画読本」大阪大学出版会、2004)

リビングにおける夫婦の居方をパターン化できたこと

今回の調査における最大の成果は、夫婦各々が、リビング・ダイニングに居る居方の実態を、距離と行為と具体的な場(リビング・ダイニング)の関係によって、巧みに3つのパターンに整理していることである。また、これを検討する上で、従来からのリビングにおける「くつろぎ系」の行為の他に、主としてダイニングに多い「はたらき系」と名付けられた行為に焦点を当てていることも意味が大きい。こうした生産的な行為は、消費や休養のためだけでなく、何かを創りだしていく場としての住居という今後の方向性を考える上で重要だろう。なお居方のパターン化のための大前提として、そもそもたとえ個室があったとしても、リビング・ダイニングに居る時間はかなり長いという実態の把握も重要な知見である。

住まいにおける個人の居場所の成立の仕方を明らかにしたこと

従来の建築計画研究では、食事・接客といった積極的な行為と空間との対応関係に焦点が当てられてきた。簡単にいえば、こうした行為を空間に適切に「割り当てる」ことが計画・設計の目的であったといえる。しかし、特別な行為がなくとも、ある場所に「ただ居る」というのは生活の最も基本的な行為であり、そこに「落ち着いて居られる」ということは、住まいが提供するべき基本的な性能である。今回の調査によって、住まいのどこに落ち着いて居られるのか、何が安定した居場所を成立させているのかという疑問に対して、他者との距離、動線、自分のものを置く収納、眺められる窓といった具体的な居場所の手がかりが発見された。これらは単なる行為の割り当てでない、個人の居場所としての住居のデザインに様々に生かされていくだろう。

成熟した居住スタイルが生まれつつある様子がみえてきたこと

これまで住まい方調査で住宅を訪問してしばしば感じてきたのは、住居空間の「ちぐはぐさ」である。住宅メーカーのカタログやインテリア雑誌に載っているような整った住まいというのはまれで、和風洋風の混在、床座・イス座という起居様式の混在、次々に登場する電化製品・情報機器等の原因で、日本の住宅のスタイルはあまりに混乱しているというのが実感であった。ところが今回の調査データの写真や、居住者の生の声の記録(個人情報であるため本報告書にほとんど掲載されていないのが残念であるが)をみて新鮮だったのは、人生の実りの時期を迎えたご夫婦たち(特に奥さん)が、様々な配慮と工夫とセンスによって、居心地のよさそうな住まいを創り上げていることであった。ようやく日本にも成熟した住居様式が生まれつつあるようである。

調査報告書執筆者：

旭化成ホームズ株式会社 ロングライフ住宅研究所
主幹研究員 松本 吉彦

旭化成ホームズ株式会社 ロングライフ住宅研究所
主幹研究員 入澤 敦子

旭化成ホームズ株式会社 ロングライフ住宅研究所
研究員 伊藤 香織

旭化成ホームズ株式会社 東京南営業所
一級建築士 木戸 将人

大阪大学大学院工学研究科 地球総合工学専攻
助教授 鈴木 毅

調査分析指導：

大阪大学大学院工学研究科 地球総合工学専攻 助教授 鈴木 毅

子育てを終えた夫婦2人の居場所

大規模訪問調査による住まい方の実態把握

調査報告書

発行 2006年12月19日
発行所 旭化成ホームズ株式会社
ロングライフ住宅研究所

〒160-8345 東京都新宿区西新宿1-2-4-1
エステック情報ビル
電話03-3344-7045